

りかへつてその次第を述べるもので、その點は敘事文と同様、時間の順序に敘述するのである。前の例文も、十年の昔、姉七歳僕六歳の春——十一月の末——歳暮——正月十五日姉の死——當時のおもひ出——今の思ひ——縁日歸りの姉弟を見るにつけて……………

と様に、十年昔に出發して、それ以後の時間の経過につれてあつた事毎に、自分の感懐をよせて出來たものである。

又感情といふものは、きつと或る事象に伴つて起きるもので、獨りぼつちで湧くものではない。何も事がないのに「あゝ悔しい」「あゝ嬉しい」「えゝ癩に障る——」など感ぜられるものでない。對抗試合に負けたので「あゝ悔しい」祭日が月曜だとわかつて「あゝ嬉しい」優勝した他校の選手が無闇に威張るから「えゝ癩に障る——」となる。して見れば、敘情文で自分が嘗て感じた通りを讀者にも感じさせようとするには、その感情を起すに至つた原因の事象をも併せてあげる必要がある。この意味に於て、純粹感情敘述の敘情文といふものは成立たないもので、すべての敘情文は「叙情に力點をおいた敘事文」とも謂ふべく「主情副知の文」といつてもよろしい。前の文例についていふと、何等の知識的敘述なしに、唯懐しい・淋しい・悲しいといひ續けただけでは「どうかしてゐる」と思はれるだけである。物思なき幼時の遊びを思出して「懐かし」といひ、唯一遊びづれの姉が病氣して「淋しい」といひ、ついにその姉が亡くなつたので「悲しい」と叙してこそ、讀者は作者に同情することが出来るのである。

敘情文は文の中で一番詩にも近いし、劇にも近いもので、この文と詩歌とは殆ど似た着想の上に成立つ。

㊦ あはれ此墓

塔婆、尙白く、香花數多手向けられたり。文字見れば
享年十八歳、俗名、永島幸子

との傍字きはやかなり。

こゝは浪華の片はづれ、長柄に近き或淨土寺なり。あはれ此墓の主よ。享年十八歳の若き御佛に、幸子とは、何の因ぞや、何の果ぞや。髪黒かれ、肌白かれ、さかしかれとて、心づくしの朝夕を送り給ひし父もおはさんに、母もあまさんに、これはしも何のむくいぞ。病は胸か、胃か、腸か……………など知らぬ墓場をさまよひつゝ、想ひは想ひを産みて、たゞすむことや少時——。

この文は拙い作だが、彼の落合直文先生の

天王寺にて

名は花子かばねは風間年見ればまだ十七よあはれこの墓

といふにも近く、又與謝野寛氏の

命死ぬや髪際よかれ歌秀でよ琴弾けとのみいつきし人も

といふにも通つて居る。

㊧ 敘情文にもられる感情

敘情文にもられる感情は悲哀とのみ限らない。

あゝ光榮の日よ、晴れの日よ、昭和〇年三月廿五日、私はこの心の故郷とも、私一人によつての古戰場とも謂ふべき校門をくゞつて、「卒業」の吉報と共に歸省の途についた。

と様の「悦樂」。故外山正一先生の「忘れがたみ」に見られるやうな「感謝」

園田の一家の者は朝から觀菊行の支度とりぐ、晴衣の亘長を氣にしのお勢のじれこみが、お政の肝癩と成て、廻

りの髪結の来やうの遅いのがお鍋の落度と成り、はては萬古の急須が生れもつかぬ缺口になるやら、棚の播鉢がひとりでに駈出すやら、ヤツサモツサ捏返してゐる所へ生憎な來客、しかも名うての長ばなしやで、アノ只今から團子坂へ參らうと存じてといふ言葉にまで、力瘤を入れて見てもはや藥ほどもきかず、平氣ですまして便々とお神輿をすえて居られる、そのじれつたさ、もどかしさ。(二葉亭四迷 浮雲)

といふ「ぢれつたさ」

寂寥として、人氣なき森蔭のベンチに倚つたまゝ、何時間自分は動かなかつたらう。日は全く暮れて、四圍は眞暗になつたけれども、少しも氣がつかず、たゞ腕組して、折々ためいきを洩すばかり、ひたすら物思に沈んで居たのである。實地についての役に立つ考案は出ないので、斯うなるといふいろいろな空想を描いては打こはし、又描く。空想から空想、技から枝が生へ、殆ど止度がない。(國木田獨歩 運命)

の孤獨・寂寥と様に。

處で、感情は極めて個別的なもので、本當に十人十色であるから、それを敘述する文も亦個性を強くあらはす必要がある。他人の感情を借りて綴るとなつては甚だ拙い。嘗て或女學校で「亡き友をしのぶ」といふ題を出したら、大抵は「あはれ悲しきかも……、これを誰かは惜しまざらむ……、かゝるを誰かはしたはざらむ……、常なきは人の世の常とはいへ」といふ風のことを列ねて居る。之はその頃讀本で習つた村田春海の「芳宜園大人を祭る詞」そつくりであつたといふ。これでは可けない。算術の九々ならば、甲が二二が四といへば乙も丙も二二が四でよろしい(それは知識だから)が、亡き友を悲しむのに古人が二二が四と泣いたからとて、つとめてその泣き聲をまねて、二二が四と泣く必要はない。まして、そのまねの仕損ひをして、二二が三個二分五厘なんて泣くに至つては益々拙い。くりかへ

していふ。感情は十人十色であるから、敘情文は同じ題材に向つても、それ／＼ちがつた感情がにじみ出なければならぬと。天上一痕の明月に向つてよんだ句も、

一茶は 小言いふ 相手もあらば 今日日月

西鶴は 鯛は花は 見ぬ里もあり 今日日月

鬼貫は しみ／＼と 立つて見にけり 今日日月

芭蕉は 三井寺の 門叩かばや 今日日月

と様にそれ／＼ちがつて居る。

④ 偏したる感情

感情は個性的のものであるから、その感情は極めて偏頗なものとなつて、讀者の共鳴を得ることはむづかしい。自己の眞實を出すのだから、どんな感情を述べようと、それが本當でありさへすればよいと思ふのは間違で、自己の生活の善いもの、美しいものへの躍進を文字であとづけるのが綴文の仕事なのだから、偏頗な敘情は努めて避けなければならぬ。

兄弟喧嘩をして叱られて、自分が悪いにも拘らず叱つた祖母を怨んだものや、駄々をこねて倉庫へほり込まれたので餘計に怒つて床に小便をして、天井の吊るし柿をとつて喰つてやつたとか、青大將を打殺して大道の眞中へおいたら、女の人を通つてキヤット謂つたのは面白かつたとか、木の實を拾つて、屋内體操場の床にその油を引いたら、大勢の女生徒がすべつてころんで、あんなをかしいことはなかつたとか、新たに買った帽子があまりキラ／＼して、見るから新まいのやうで面白くないから、わざと手で揉みくちやにして、徽章は一度赤焼にしてさびせたら、ヤツと相當の古さ

になつたとか、途方もない太いズボンをはいて、片チビのした下駄で、カラリ／＼町を歩くのは一寸痛快だとかいつた風のもの、生活そのものがよろしくないのだが、又そんな感情を表現した文章とても、萬人の首肯するものではない。これは何も生徒と限つた譯ではない。古人の作品でも「その文はよろしいが、その想は偏して居る」といひたいやうなものがよく出て来る。

⑤ 極端に誇張した感情

又一寸悲しいことを非常に悲しいといつたり、一寸面白い位のことを「生れてからこんな面白いことはなかつた」といつたり、凡て感情を極端に誇張して、最大級の形容つきの敘情文にすることもよくない。

⑥ 高校入學受験の記

受験——平和な田舎に極みない夢の中の道を通らうとする少年を一朝にして現實のこの冷やかな道に誘き出すとは、何て無情な仕打だらう——

美しき夢の中に生きる少年よ、いつまでも美しい夢の道を通つてくれ、私はいつも諸君のためさう祈らずにはゐられない。(大正十三年一月十五日發行中學世界三二一)

「高校入學の困難さから推して、受験者の中には實際からまで深く感じるのもたまにはあらう。(時には神經衰弱のために自殺した者すらあるのだから) けれども何千といふ夥しい入學者のある受験をば「何て無情な仕打」などいふのもひどいし、田舎の中學生活とても「極みない夢の中の道」ばかりを通つてはゐまい。まして後進に向つて「いつまでもその夢を通れ」とは何の事か、そんなことをしては中學生活は無意味に終るではないか。否な勧める本人は更に今後の捲土重來に渾身の奮勵努力をつづけてゐるではないか」とでもいひたい。知識を銜ふことを銜學的といふが、こんな

文は銜情的とでもいひたい。年齢も違ひ、場處も違つてゐる。(前の文は九州の某卒業生、次のは北海道の一下級生) が次の一記事文に盛られた感情は、之に比べるとずつと素材で、その點に於ては優れて居る。

⑦ 思 出

中學一年、今思ひ出すと七年前である。僕は一年生となつて學校へ出てゐた時である。先生は今日わたしが算術の數字を讀んで、皆様がそれを書くことをけいこませうといはれたので、僕は喜んで、ノートを取り出して書き初めた。するとやがて年寄の校僕が先生を呼びに来て、先生はのちらへ行かれたから、生徒等は今まで行儀よく勉強してゐたのが、今は上を下への大さわぎとなつた。もちろん僕もその中の一人であつた。するとその中の澁谷といふのが「家へ歸りたくなつたなあ」といひ出した。「ウン、ウン」と方々で之に賛成するものがあつた。

これをきいた僕は急におばあさんの事を思ひ出した。僕はお母さんが早く亡くなつて、ずつとおばあさんの手一つで育つたものだ。「歸らうか」「どうしよう」など、皆がグズ／＼いつてる中に、僕はたまらなくなつて、一番がけに「僕おばあさんのお乳を呑みたいから歸る」といつて、ビロウドの海軍帽を被つて、カバンを肩にかけるなりサツサと歸つて「おばあさん只今——」とやつた。處が、女中が「おばあさんは親類の高木へ行つたよ」といふもんだから、カバンをほつておいて程近い高木のうちへ行つて、「僕のおばあさんゐるの」ときくと、「ゐられるからマアお上り」とすゝめられて上つた。するとおばあさんは「早や學校はすんだの?」とふしぎさうにきかれる。「イヤ、まだ——僕はかいりたくなつたので歸つたの」つてあの頃は本當にノンキなものだつた。

翌日學校へ行つてみんなに笑はれた。僕が四年の時稚内に來たのだが、その頃になつても郷里から來る人は、アノ一件を持出しては僕の顔を赤くさせて面白がつてゐる。今考へてみると、あの頃は本當に「甘え坊」だつたなあ恥

づかしい。が、併しあの頃が僕の幸福な時かも知れない。今こそ稚内中學一年生と威張つてゐるが、本當に小さい時は面白い。(大正十五年十二月一日國語教育四九—五〇阿部由二氏の寄稿。原文は幾らか變へておいた)

⑧ 悲しといはずに悲しがらせよ

話の上手な人は、自分はずつとも泣かないで居て聴衆を泣かせ、自分は平氣でゐて満座噴き出す程のをかしがらせをいふ。叙情文もさうで、作者一人が

あゝ悲しい、あゝ悲しい、わたしは本當に悲しくてたまらぬ。といった處が讀者には同情しやうもないものだ。それを

さればとて、墓に着物も着せられず。

とすれば「悲しい」とは一口も言はないが、寒夜亡兒を懷ふ母の悲哀がよく響く。だから

あゝ暑い、あゝ暑くてやりきれない。本當に今日は無類飛切暑い。とはいはずに

いふまいと思へどけふの暑さかな——

などいひ、

武藏野はすむぶん廣いものですよ。とはいはないで

露おかぬかたもありけり夕立の 空より廣き武藏野の原

太田道灌

とする。悲しいといはずに悲しい心持を湧かせ、暑いといはずに暑いと感ぜさせる、それが敘情文を作る上に必要な手法である。そしてこの手法の心得としては、抽象をさけて具象につくといふ一つで盡きて居る。「廣い」などいつては抽象的である。それを廣い事實——眼に感覺せられる事實、即ち「夕立の空より廣い」とすれば具象的となる。「暑

さ「悲しさ」も亦)

【乙】 感想文

① 神統皇正記の北條泰時論を讀みて

師範三年

國史上の一大恨事とも謂ふべき、南北朝當時の状態を観た親房卿の心事を顧みる時、私はいつもそれは熱烈燃ゆるが如き忠義の結晶であり、悲憤慷慨の連結である事を知る。彼が不朽の名著神皇正統記中の一節に、北條泰時を論じたのを讀む時、殊にこの感じを起す。

社會は權力階級の精神如何により、安寧秩序が維持せられもし、又攪亂されもする。即ちそれが超個人的か、個人的か、超現代的か、現代的かによつて、それに統率される社會民衆は、或は幸福であつたり、又みじめであつたりする。

陪臣の身として權勢を張つた鎌倉三代の執權、彼れ泰時は、一面から觀れば確かに非難されべき點があらう。併し機を見るに聰明であり、心事に於て高潔な彼の人格は、よくその權力を善用して、日本を泰山の安きに置き、そして國民の幸福を増進した。彼と權勢の點に「相似をもつ」足利尊氏はどうかといふに、その人格は正反對で、純然たる個人的で、愛の擴張は自己に止り、又その行動は全く現在の欲求を満たすのみで、豺狼の欲と變りはなかつた。こゝに彼の卿は、この兩人の人格に雲泥の差のあることを見出したのであらう。「近代の特質を見て、將來の鑒戒とすべきなり」といつた卿の言葉は、畢竟權力は善用すべき事を教訓したものであらう。低劣な尊氏は現在の欲求のまに／＼、その權力を悪用して、遂に北朝といふものを出現せしむるに至つた。

今更いふまでもなく、我國の天皇は憲法第三條の明文なくとも、神聖不可侵の御實在に渡らせられる。だから臣下

として皇位繼承に口を挟むやうのことは、その分を越えて居る。この意味に於て泰時も亦非難を免れない。けれども衷心皇室のため、國家のため、佞臣の企圖を退けて、正統の後嵯峨天皇を御位に御即かせ申した泰時と、賊名を避けようばかりに光嚴院を擁立した尊氏とを比べて見ると、権力は泰時によつて善用せられ、尊氏によつて悪用せられたことが歴々として認められよう。卿の筆意恐らくこの點を一般に教へようといふにあつたらう。

今や思想問題を呶々し、外來輕浮の思潮滔々として一代に流布し、人民その歸する所に迷ふに當り、吾々は切に昭和第二の親房卿の出現を期待する。

神皇正統記中、泰時・尊氏の一部を採つて、讀後の感想を述べたもので、條理も整ひ、措辭もよろしく、師範三年程度としては佳作である。これは議論文と謂つてもよろしいが、情味のうるほひも相當にあるし、又叙情文と謂ひたい點がある。但内容は確かに一種の史論である「即ちこゝにいふ感想文である。どちらかといへば議論文に近い感想文である。

㊦ 春は逝く

師範二部生

この節のドンヨリ曇つた日などにはよく考へる。校舎の窓から遙か彼方に續く連山を眺める時、雨を催す様な薄暗い空を仰ぐ時、そして忍従と倦怠の授業から逃れて、幻に過ぎた昔の夢を追ふ時、私はたまらなく涙をおとす。過ぎた昔が懐かしい——輝やかなしい抱負を語り合ひながら、共に五星霜を送つた中學生時代が慕はしい——。短い秋の太陽が綺麗に茜して西の山端に沈む頃、いつも七八人の友達と一緒にやがて訣れねばならない校舎に、さては校庭にそりたつ白楊に、積る哀情と、戀慕と憧憬とを残しながら、暮れ近い大路を、聲高らかに應援歌など歌ひながら、家路についたものだつた。又焼けつく程の炎天の下に、僕等はいつもの馴染の濱邊——白砂光る濱邊に走つて行つた。そ

して若人の限らない夢想を乗せたボートは、虚空に羽ばたく大鵬の如く、白波蹴つて進んだものだつた。その時に、やがて襲つて来るあの切ない訣れの事をどうして氣がつかう？ が、併し「流轉は人生の宿命なのだ」時は容赦なくズンズンたつて、僕等は復會ふ儚ない日をかたく約しながら、西に東に、成功の曙光を目指して散つて行つたのだ。

そしてその一人たる僕は、今かうしておさまつてゐる。あゝ今年も亦緑は萌え、雲雀は奏でる「三春の行樂」空しく過ぎて、今に夏がやつて来るのなのに、それにたゞ一人ボツチで、不精に過ぎた昔の夢を追ふ僕には、活氣溢るゝ初夏の訪づれもはかないものである。永い間慈母の翼に抱かれてゐた小雀が、まだ見ぬ空の世間に巢立する時に感ずるやうな、妙にわびしい、悲しい、人懐かしい氣持を私は毎日味はつてゐるのだ。

都の空に、成功に精進する友は健在か？ 遠く滿洲の野に病んでゐる友の思ひは如何あらう？

よく人は「春愁」といふが、この語の含む意味をば、僕はこの頃になつて、やつと切實に味はひ得たかのやうに思ふ。

これは誰が見ても感想文で、しかも敘情味の豊かな感想文である。古來男女を通じて筆を染め易いのはこの種の文で、これが又讀者には觸りが柔かで、浸み込みやうが深い、即ち物につけ、折に觸れて書いた「隨筆」といふのがそれに當り、近頃は之を感想文・感想論文・エッセイなどいふ。枕草子・徒然草・花月雙紙などはその有名なものだが、大正以後、隨筆文學の勃興につれて、古典隨筆も、創作隨筆も、續々發表されて居る。之を抽象的にいふと

感想文とは、自己の見聞を印象的に情趣化した文章で、時に餘他の文種と共通した分子があるとしても、この「印象的情趣化」といふ點がいつも儼存した文體である。

◎ 草 篇

永井 荷風

一八六

去年の秋より冬にかけて、われ人なき庭に唯一人、落葉掃きつゝ木々の梢の色かはりゆくさま仔細に打眺め、つれづれの餘り、手帳に控へ置きけり。春より夏にかけて、若芽・青葉の緑、木々により濃淡。強弱さまざまに湧きいづるを、若し西洋の音楽に譬へて緑の管絃樂とも名付け得たらんには、憔悴の詩情云ひがたき黄葉の管絃樂は、まづ十月より其の序曲をば奏で出づるなり。

梅・櫻は盛夏の候早く病葉の黄ばみ落つる事多けれども、そは數へざるべし、後の彼岸に残暑も今は全く去りぬる夕、碧桐・椽・槐・皂莢の葉はいつしか打ち黄ばみたり。わが庭に一樹の木蓮あり。木蓮は、人その花のみ愛づれども、黄葉またなか／＼に捨てがたし、椽の高き梢に鳴啼き叫ぶ十月となるや、大さ柏の如き木蘭の葉は、淡くほのかに黄ばみ出づ。其の色曇りし日の夕まぐれ、夜將に來らんとする境には白く影の如く浮き立つさま、果敢なくも又哀れなり。さても十一月となり、冬いよ／＼迫り來れば、色淡き黄葉は次第に褐色となるより、早く枝を去るなり。

(現代日本文學全集二十二、永井荷風集四五六斷腸亭雜藁)

◎ 矢はずぐさ

同 上

六……………

われ生れて煎藥と云ふもの呑みたるはこれが初めてなり。この藥たしかに効能あるやうに覺えければ、其後は風邪心地の折とても、アンチフェブリンよりは、葛根湯・妙振出しなどあがなひて煎じる事となしぬ。例へば雪みぞれの廂を打つ時など、田村屋好みの唐棧の襦袍に、辛くも身の悪感を凌ぎつゝ消えかゝりたる炭火起し、孤燈の下に煎藥煮立つれば、夜氣沈々たる書齋の中に、藥烟漲り渡りて深けし夜のさらにも深け渡りしが如き心地、何となく我身な

がらも涙ぐまるゝやうにてよし。(同上四三八)

の如き、舊江戸趣味と、近代歐米趣味とを自己に調和した作者の細かな情趣の表白として面白い。

感想文の作者は是非とも自己を確立する必要がある。尤他の文種とても、自分の立場がぐらついてゐては、碌な作品が出来よう道理はないのだが、とりわけこの感想文となると、最早一個の人生觀なり、主義なりが確立してゐなくてはならない。

寸陰惜しむ人なし、これよく知れるか愚かなるか。

といつた兼好と

あゝ又一つ年をとつた。惠方詣の群に交つて、プラットに立つ我が烏打帽の痛ましさを。

と入試落第の感想を書いた一學生の語句とには、一見何等の相違もなく、どちらも烏兎匆々の感を述べたものが、兼好のは彼獨自の人間の觀方から來て居るけれども、學生のは最近二三年の生活感から來てゐるだけである。

又兼好が、

古は「車もたげよ」・「火かゝげよ」とこそいひしを、今様の人は「もてあげよ」・「かきあげよ」といふ。

と云つたのと、今の老人が

以前は「ドンタク」・「散斬」といつたのを、この節の人は「土曜日」・「理髮」といふ。

と云ふのとよく似て居るが、兼好のは「何事もふるき世のみぞ慕はしき」といふ尙古主義から出發したのだから、深味があるが、老人のは唯個々の語の今昔の對照だけで、何れを可とも不可ともいつたわけでない。かりに以前を優つたといつたとしても、唯この二語についての感想で、他一切の人生に投げた價値觀とは見られないから淺い。一つの感想

文を見てこれには作者の自我が確立して居るかどうかといふことは、右のやうな短小な一語句ではわかりにくい、その一篇を通讀すると、略々見當がつくし、その人の凡ての作品を見通すと一層明らかになる。

次には最も創新味に富むことが必要である。

雪を見て「銀のやうだ」、花を見て「雲のやうだ」、月を見て「盆のやうだ」と様の云ひ方は、稽古としては許されもしようが、實はもう幾千百年の昔から云ひふるされて居るのだから、そんなことを今更書いても、それは自分の感想にはならない。古人の借着である。同じ題材の雪月花でも、人毎に感じが違へばこそ吾々は、各人の作にかゝる同一題材の文章を飽かずあさり讀むのである。(徒然草一三九段)

⑤ 梅

兼好法師

梅は白き、うす紅梅、一重なるが、とく咲きたるも、かさなりたる紅梅のほひめでたきも、みなをかき。おそきうめは、さくらにさきあひて、おほえおとり、けおされて、枝にしほみつきたる、こゝろうし。ひとへなるが、まづさきてちりたるは、こゝろとくをかして、京極入道中納言は、なほひとへ梅をなん、軒ちかくうゑられたりける。京極のやのみなみむかひに、いまま二本侍るめり。

⑥ 花のいろく、梅

幸田露伴

梅は野にありても、山にありても小川のほとりにありても、荒磯の隈にありても、たゞにおのれの花の美しく、香の清きのみならず、あたりのさまをさへ床しきかたに見さすものなり。崩れたる土屏、歪みたる衝門、あるは掌のくぼ程の瘠島、形ばかりなる小社などの、常には眼にいぶせく、心にあかぬものも、それ近くこの花の一と木二と木咲き出づるあれば、をかしきものとぞ眺めらるゝ。とへば徳高く心清き人の、如何なるところにありても、其居ると

ころの俗には移されずして、其の居るところの俗を易ふるがごとし。(調言)

同じ「梅」についても兼好の感想と、露伴氏のそれとは、大分趣の變つたものがあつて、而かもどちらも清新な味がある。

次には熱烈な表現欲である。題を出されて、いや／＼シブシブ綴るのでは可けない。大半の滋味滴るといふやうに、内に多くの高尚な感想があつて、「やむにやまれぬ氣持で」心ゆくばかり紙上に展べたものが、感想文の上乗である。諸子は會議の席で、物いひたげな意見の所有主が、口の邊に優しく筋肉を微動させたり、行き違ひの汽車の窓に「オヤツ」と云つたなり、物いひかはす暇もない煙の末を、怨めしげに追うて居る人の顔つきを見たことがあらう。感想文の作者の心持は、丁度それ等の人々の表情に似たものがなくてはならない。「いはねば腹ふくるゝ」と古人の云つた境致がそれである。

最後に、それが無造作な書きなぐりにならないやうに、注意しなければならぬ。自分の感想のまゝに書けばよいのだから、極めて自由であるべきだが、放任に綴つた行文は可ない。自由といつても心の聯想には、略一定の法則があるものだから、へうたんから駒が出たり、足許から鳥がたつたりするやうな、突飛な飛躍はない筈である。それを筆まかせに書いたものは、讀むものにとつても煩鎖な感じがするだけで、しんみりと胸にひゞかない。「隨筆は即ち書きなぐり」と心得て、何でもかでも書きつ放しにすることは最も避くべきである。

第十三章 議論文

序 説

日本で議論の早いものには、高天原朝廷の天照大御神と素盞鳴尊とが、尊の神格の潔白について誓約をせられる處や因幡白菟が、海の鰐とどちらが族類が多いか争つたことや、播磨風土記で大國主命が少形名命と賭をして「石を持つが苦しい」「イヤ大便をこらえて行く方が苦しい」と争つて、大國主命が負けて、大便を排泄せられた話などで、全く他愛もない單純なものであつた。萬葉で山上憶良が畏俗先生を戒めて、

久方の天路は遠しなほくゝに 家にかへりてなりをしまさね

と云つた長歌には、反老莊主義の主張が含まつてをり、大伴旅人が、

この世にも楽しくあらば來む世には 蟲に鳥にも我はならなむ

には現世享樂の主張がほのめいて居る。佛足跡歌には佛教禮讚の想があり、王朝、古今集序などから國文の議論文が始まり、大鏡には大宅世繼と侍との間に、處々史實の異同を論じて居り、近古、愚管抄に政治史論あり、無名草子に文學評論あり、軍記物に策戰計畫についての論議あり、寶物集に「何物か第一等の寶なる？」についての沙汰がある。室町期太平記に治亂興亡の得失論あり、神皇正統記に國體論・大義名分の論あり、世阿彌十六部集は高級藝術論として重きをおかれ、近世に入つては議論文の分野頗る廣まり、上は政治論から、下は市井の役者評判記に至るまで、到底屈指の繁に堪へない。幕末内外多事となり、尊王論・佐幕論・討幕論・公武合體論・開港論・攘夷論等々、朝野の議論頗る沸騰し、明治維新言論の自由を認めらるゝと共に、政治・學術・宗教・教育・産業・交通あらゆる文明の施設には、必らず甲論乙駁を見、議論文は量に於て、質に於て、頗る長足の進歩を見るに至つた。今日にあつては各種専門の新聞・雜誌・述作は勿論、一般向の日刊新聞の社説・時評・短評・讀者の投書・雜誌の寄書・卷頭言・議會の議事録・各府縣市町村會の議事など、凡て議論文の内容をなすもので、何か一つ新しい意見を立てて、之を實現しようとかゝると、賛否折衷まち／＼の議論が、まるで蜂の巢をつゝいたやうに盛に出るやうになつた。

さて議論文を作るについては、どんな心得が入るかといふに、

① 論理的

氣分や直覺では可けない。まして感情では可けない。是非とも備へなくてはならない要件の一つは、この論理的といふことだ。

水は大きな軍艦をも浮べる

(コップに一杯の水を指し)

これは水だ

だからこれは大きな軍艦をも浮べる

などいふのは、大前提に於て「一定量以上の水は」と限定すべきを忘れた命題不周到の誤である。

彼が欠席は、病氣か、他行か怠慢かの故なり

然るに彼は病氣もせず又他行もせず

故に彼が欠席は怠慢の故なり

と云へば、一見不容間位律に適合して、正しいやうだが、何ぞ知らん缺席は父母近親の危篤の故にもするし、突然遠方からの來客があつてもするし、隣の子供が盲腸炎で入院する爲めにもするし、向の家が丸やけになつた爲めにもするから、缺席を三個の場合に限るのが抑々間違である。

これはなぜ鳥か？

黒いから

なぜ黒いか？

鳥だから……………

いくら續けても果てしがない。論理學では之を同一論法、若くは循環論法といひ、通俗には之を水かけ論といふ。この論法で賢明な結論に到達することは、百年河清を俟つよりもむづかしからう。

地震は地下で大鯰があばれるからだ。それは丁度、子供が蒲團をかぶつてあばれるやうなものであらう。

といへば、譬喩は一寸尤もなやうだが、これは臆測といふもので、正しいこともあるが、誤つて居る場合もある。

昔冤罪の死刑囚が、刑に就く間際國王が引見して、「若し朕の心中を言ひ當てたら、汝が一命を許すであらう」との仰せにしばらく考へて、「陛下は今私に『若し朕の心中を言ひ當てたら汝が一命を許すであらう』と御言ひ渡しになつて、私に答へを命ぜられ、私が何とお答へするかを聞かう。聞いた時殺す氣だつたら違ふといつてやらう。助ける氣だつたら、『いかにもうまく言ひ當てたといつてやらう』と、かう御思召であらうと存じます」といつたので、「成程それより外の思ひ様はない」といつて、一命を許されたといふが、これは時にとつて賢い答解としての話柄だが、一本の針頭に幾つの點が充たされるかとか、點は幅も長さも位置もないのに、甲點乙點とは如何とか、一羽の鳥を二羽鳥とは如何とか、一枚でもせんべいとはなぜ？などいふのは、所謂詭弁とか、團子理窟とか、固理窟といふもので、決して堂々たる論陣を張るに當らない。「破邪顯正」といつて先づ反對論の誤謬を指摘し、次に自説の正しい所以を論理整然と述べることが何より大切である。洋装を主張するものは先づ和服の不利不便をあげ、假名を主張するものは漢字の缺點をあげ、新に賣藥を廣めるものは先づ在來類藥の不利益をかぞへるのは、皆破邪の筆法である。そしてそれ等は必ず自説の正しいことをそれと對照的に強調する。即ち顯正の筆法を以て之に繼ぐのが普通である。

● 公平

近頃新刊圖書の紹介で、發行書肆の針小棒大的吹聴は恕すべしとして、さもなく、堂々たる大新聞の寄書や新刊紹介欄にまで、小さな黨人的感情や、術學的動機から、あまりその書の眞髓にも觸れてない、お座なりを並べたり、自家の博學を吹くやうの批評が往々あるのは遺憾なことである。主張するなら公平に、これにも斯々の短處はあるが、併してこれの美點があつて、彼此差引いても大に諸君に推薦して宜いと信ずるといふ立場から筆を執つてほしい。坪内逍遙博士の「都會と田舎」などは、啓蒙的な短文だが、所論は極めて公平妥當である。

破邪も顯正も正當なる理由の下に進めなくてはならない。保元の亂に爲朝が夜討を獻策する處は、自己の經驗と時宜の形勢とから割出した名論であるにも拘らず、左大臣頼長が王師は宜しく堂々の陣を張るべしなど、空虚な反駁と左大臣といふ地位とで、横車を推したのはよくない。それは丁度太平記で尊氏東上に對して、正成が情理を盡した獻策にも拘らず、參議清忠が反對して、湊川合戦となつたのとよく似た論議であつた。議論の眞髓を衝かないで、地位がどうか差當り動くは臆空とか、果ては枝葉の人身攻撃に馳するやうな議論は殊に謹しむべきである。

● 熱情

公平無私はよろしくないが、無風帯のやうな調子で、士族の商人が「ほしけりや買へ」と澄まし込んだやうに、何の熱情もなしに冷々淡々と怛懷を吐くといふのでは、相手の胸に通る何物も無いであらう。宮武外骨氏の明治演説史に、多くの圖解を入れて、代々の辯士が灼熱の表情姿態を以て、大獅子吼してゐる挿繪を見ると、此熱あつてこそ満座を感動せしめたものであらうと想ふ。自分は聴かなかつたが、之が速記の係をしてゐた先輩の話に、彼の「孔夫子」の一部を遺して天折せられた平沼文學士（名は金三郎）が一夏柏原町に来て、教育者の墮落を憤慨して二時間に亘つて講演せられた時は、滿堂肅として、しはぶき一つするものもなく、先生自身もたび／＼嗚咽せられ、速記者の先輩も涙をポトポトと用紙におとして、數ヶ處ブランクを作つたとのことであつた。（時代は吾々より一時代昔で、多分明治卅年前後の事と想ふ）愛は愛を産み、熱は熱を産む。これだけの熱意熱誠あつてこそ、自己の意見を他に強ひる權利もあるといふものだ。顧みて一知半解の吾々が、妄に道に聽いて途に説くやうな淺薄な論議は、眞に慚死すべきであらう。況や吾が胸奥の信念を曲げて、爲めにする處あり、權勢に阿る處ある議筆は沙汰の限りと謂ふべきであらう。

④ 堅忍自重

一箇の意見を主張するには、強い意志が入る。「西ふけば東にたまる落葉かな」と様に、ちよつとのきつかけで、直ぐグラ／＼して、朝三暮四何の歸趣も中心もないやうな、根柢の淺いことでは可けない。主義主張といふものは、時處の如何に拘らず、自己の正しと信じ、是なりと執するものでなくてはならぬ。之を支持すること己に大きな努力が入るが、更に之で他に賛同を得ようといふには、更に容易ならぬ根氣が入る。孟子梁惠王章句を見る者は、孟子が如何に陰忍して、對人説法の呼吸を以て、先王之道を主張することに努めたかがわかるであらう。王が「寡人疾有り寡人色ヲ好ム」と云へば、好色の門から仁義の道に入る論議をし「寡人疾有り寡人勇ヲ好ム」「寡人疾アリ、寡人貨ヲ好ム」と王が

遁辭を以て廻避しようとするのを根氣よく追及して、王の言に基いて滔々數百言、而かも聖賢仁義の大道は終始一貫強調されてある。

近頃の文學批評は、とかく無責任な座談會の漫評や、外面的滑走の短評ばかり多くて、一頃齋藤野の人が、坪内逍遙博士の新樂劇作品に對する評や、森鷗外・坪内逍遙兩大家在、沒理想論を闘はれた頃のやうな、重厚な論議が少くなつた。

⑤ 譬喩・引例・機智

實現の困難なことには「木によりて魚を求むるが如し」といひ、人民の切望には「大旱の雲霓を望むが如し」と云ひ姑息の手當を「燒石に水をそゞぐ」といひ、美しい口實の下に私意を充たさうとするを、「敵は本能寺に在り——敵本主義」といひ、某電燈會社に對して、料金値下運動の檄に「諸君よ——諸君にとつては拾錢たりとも、五錢たりとも否な一錢一厘たりとも、是れ貴重なる諸君の血と汗と膏の結晶でないものはありますまい。而かも此等を搾取した會社の社長始め、重役は之を何に使つてゐますか、一に自分の贅澤、二に蓄妾、三に遊興。あゝ諸君よ、假に茲に汝の血一疋を絞つて、豚に輸血せよと云ふものあらば、誰か之を憤慨しないものがありません。今の會社の遣り口は、丁度この豚輸血の強要であります。如何に濃厚篤實なる諸君と雖も、我血を絞つて豚に奉仕せよといふのを黙過する譯にはゆききませんまい。我料金値下運動は、この不當搾取を指摘して、豚と我々との需給關係を一蹴しようといふのです。ふるつて御賛成を希望します」と謂へば、豚輸血の譬喩によつて作者の主張は、一層強く讀者の胸に逼るやうになる。

又從來の短歌が實感に即しないで、唯形骸だけに囚はれて居ることを「譬へば或病氣の特効藥を人に知らずといふので、使を立てその藥の名を短冊に書いて渡し、藥の特徴や用法や附帶注意の何かには、口で言ひ聽かせて遣つた處が、

その使は中途ですつかり忘れてしまつて、先方へは唯その短冊だけを渡したのに、先方ではそれとも知らず、これは有がたい薬だといつて、その短冊だけを重寶がるやうなものだ、今の歌よみは皆この短冊かつぎだ(大隈言道の歌論)。」といへば、歌道以外の人でも略その主張の眞意を汲みとることが出来る。

又「獨を慎しめ」といふに、「昔支那の楊震は天知る、地知る、子知る、我知る、何ぞ知るものなしといはんやと謂つて訴人の賄賂を卻けた」といふとか。「古歌にいふ

なきなぞと人にはいひてやみぬべし　こゝろのとはどいかにこたへん

と」など引いて前提とすると引用法になつて、以下の議論を滑らかに受容させる効果がある。

演壇に立つて、その場にある事物を採つて本題に入つたり、議論文を作るに當時世間の噂で有名な事件を引いて、それから行論を進めることは、彼の講談・落語が當日の天候だとか、自嘲の自己紹介とか、何かしら聴衆を笑はせながら當夜の題目に引張つて行くのと同じ行き方でせられるもので、此には相當の機智が入る。大正三年の春、大阪土佐堀の青年會館で、宮武外骨氏が帽子を被つた儘で登壇すると、聴衆は頻りに「脱帽々々」と叫んだ。丁度その演題が「帽子を被つて」といふのであつたから、氏自身の豫定にはあつたことも知れぬが、その時氏は

「題は「帽子を被つて」といふのだ、イヤ願がどうあらうとも今日はこのまゝでお話を進めます。辯士が諸君に敬意を表して脱帽せねばならぬものならば、諸君も亦辯士に敬意を表すべきである。然るに諸君の中には大分帽子の頭を出されて居る——それそこにも一つ……あそこにも一つ、イヤ後の方は比々皆然りといつた程、澤山の被帽頭が列んで居る。我輩がこゝに立つたのは被選舉者として、諸君の同情にすがらうといふ投票乞食のまねことではない。諸君の政治意識に於いて缺けてゐる或ものにつき、聊かその蒙を啓かうといふのだ。して見れば今席の我輩と、諸君とは對等と

ころか、講師と聽講者、先生と生徒といふ格だ。そこでこの講師先生、大威張で帽子被りつゞけの一席を辯じようとする次第であります……イヤ斯ういへば立派だが、この帽子をとつては辯士の頭は、これこの通り禿げて光つて居ります。帽子をかぶれば堂々たる論客、帽子を脱げば貧弱なる禿げ茶瓶、思ふに今の政治家にもこれに似た事が澤山あります。私の禿げは可いとして、政治家の禿げは是非諸君も知つておかれる必要があると思ひます。で、以下暫らくその方の禿げのことを申しませう……」で、所謂大向をヤンヤといはせて、うまく論歩を進めたといふ。

六 達意

筋がよく通るといふことは、何種の文でも必要で、文に「明瞭」と「統一」の必要な限りは、どこにでも要求せらるべきだが、殊に議論文では、これが成効と失敗のけじめにさへなる位大切なことである。或はいふ「論理的でさへあつたなら、達意は期せずして得られるではないか？」と。處が論理には合つてゐても、その論陣があまり繁鎖で、面倒では讀むに飽きて、讀者の共鳴は得られない。達意は畢竟單純論理の構成によつて獲られるもので、言葉少なでゐて讀者に成程と肯づかせる底の論法だ。國文の文では近世村田春海の「歌がたり」の論旨などがよく趣旨にかなふが、現代文で引例すると、次の一段などがその適例である。

□「宇宙」序

三宅雄二郎

過去の人は現在の進歩を促しし者、現在の人は過去の儘に止らず過去の勞を謝すると同時に、現在に爲すべきを爲し、將來の進歩を促すべき順序にして、斯く貧しき記録も、現に生存する者當に爲すべき一事業と考へしに出づ。口を開けば愚を知らるれど、愚なる者が愚を掩へばとて能く何をかせん。獅皮を被りて沈黙し、以て衆を欺くは、驢鳴して相應の荷を負ふに孰れぞ、富まず且つ貴からずして、一頃の田に値せざる事に従ふは、愚之に過ぎたる無きも

智者の滔々唯富を求め、唯貴を求め、積みて愈々積まんとし、昇りて愈々昇らんとし、是れ以外に少しの思ふ所あらず、少しの爲す所あらざるを奈何せん。愚者なかりせば、誰か富貴に縁なき事を試むべき。

これは著者謙遜の辭で、著者程の人が眞の愚人ならば、世間一般の人々は大愚か至愚かわからない。けれども世の大家といひ、學者といふ者が徒らに高く標置して、何等啓蒙の述作なきは遺憾であるとして、此宇宙觀を披瀝せられた著者の眞意は能くこの序言で諒解せられるであらう。

⑦ 人身攻撃を避けよ

これは已に、感情に偏してはならないといつた注意の處であげた事で、又「人を以て言を廢せず、言を以て人を廢せず」といふ正しい見地に立つ人々に訴へる場合ならば、譯なく實行もせられるが、人によつて言論に強弱が出来、言によつて利害榮辱の追分の危機をはらむ險惡の世に善處して、本當に冷靜な、公明な立論をすることは、なか／＼むつかしい。元祿の昔、大阪、井原西鶴の浮世草紙の作風が、京都に入つて八文字舎本となり、その流布の隆なことは、八文字舎本時代といふ一時期を劃した程であつた。が、この八文字舎本は、表面は書肆八文字舎自笑の名で版行し、内實は江島屋其磧の執筆に成るもので、本の名が上るにつれて、其磧は様の下の力持、馬鹿々々しいといふので正徳・享保の頃、一時八文字舎と仲違ひをした。今も似たことはよくあるが、それは大抵紳士的で、別れて後までも相手を彼此惡口するやうなことはないが、出版良心の乏しいあの頃のこととて、別れた御互はめい／＼相手の惡口をいひ合つた。即ち其磧は「役者目利講」に

そも／＼八文字屋八左衛門と申す草子屋は、何にて世間へ廣く名を發し候や、二條正本屋同鶴屋は、古來より淨瑠璃本にて名を取り、八文字屋は、京芝居の歌舞伎本を板行仕候外、さのみ家名を御存知にても無之候。然る處此作者

其磧、色三味線又は曲三味線、禁短氣、傳授紙子、色情あい雛形、御伽會我的類、なぐさみの書、數年あまた遣し候處に、各々様の御意に入り、八文字屋・八文字屋と、是より浮世本、評判本の名とりの様に罷なり候事、八文字屋の功にて候や、作者其磧のにて候や、此段は／＼かりながら世の人様御了簡可被下候。

自笑も亦「色景圖」を出して、その中「京の巻」に「祇園牛頭天王御託宣」と題し

爰に目利講といへる評判本に、八文字屋が作を雜言した慢心、いでいでこんじ替て取らすべし。先目利の口上の上中又は白字の上など申位付をいたして、役者口三味線と題號して、江島屋の新作者が作りたりと出たり。其口三味線よばはり、八乳の猫の腹の皮ないぶんぞや。白字の位は口三味線より八年後、役者友吟味より付しぞ。是八文字が他の作を假らざる證據なり。

其磧が八文字屋の素性まで洗ひ立てたのは、人身攻撃であり、自笑が僅かな評語を工夫して、創作の功を己に歸せしめようといふ論法も外面的で、何等論點の中心には觸れて居ない。文藝批評に作家の私行をあばいて、それを非難の補助につかふ例や、宗論の争ひに教義はにおいて、異教徒の素行を云々するやうな論議をつつたものは、皆公明正大とは謂はれない。と同時に論議なる美名によつて、自己の立場の保護色を造つて、感情のお化けを文章化したものにも、斯種の缺點が間々見出される。

⑧ 獨斷を避くること

獨斷はひとりぎめのこととて、何等依據する事實も眞理もなく、唯自分がさう信ずるから、それが正しいと論下するものである。二條派の人々が定家の言を金科玉條として、その上定家の言を勝手に偽造し、「歌道に於て定家卿をもどくものは、天罰立どころに到るべし」と極言するに至つたのは獨斷論である。眞理と虚偽は何故に定家と非定家とに因て

別れるかの理由は言明しないものである。或は制の詞の目を立てて「ほのく」とは詠むべからずといふ。なぜかと反問すれば「是れ人丸の歌詞にあればなり」と答へる。「なぜに人丸の歌詞は用ゐられないか？」と聞いたら、「主ある詞は詠むべからずとは是れ定家卿の教へではないか」と言つて、これで疑惑が一掃せられるものと思ひ込んだ様子が見える。否な二條派のみならず、近世歌論の盛なる、量に於ては随分澤山出たが、質に於ては大部分この獨斷論で占め切つて居る憾みがある。寛保二年荷田東磨が「國歌八論」を出すと、延享三年には田安宗武の國歌八論餘言が出る。續いて在滿の再論・眞淵の餘言拾遺・國歌論臆説・宗武の國歌臆説剩言……と出て、寛政五年荷田松圃の國事八論に至るまで十七種、歌は風教に補ひありといひ、なしといひ、萬葉第一といひ、否古今第一なり、吾々は貫之に毎日香をさぐべしといひ、否々新古今こそ第一なり、年ごとに事物進歩すといひ、古歌も現代の好みに合ふやう變容せよといひ、古歌を變容せよとは以ての外だといふ議論は盛んだが、議論文としては合理的な前提や、根拠に依據したものが少い。幕末香川景樹が桂園一枝を書くとき、直ぐ信田信磨が桂園歌難選を書き、宮下正岑が桂の曲枝を書く、するとそれ等二つの非難を非難して、座田太の桂園難歌選評が出る。それがよくないといふので、秋山光彪が桂園一枝評を書く、その又光彪のが妄評だといふので、中川自休が大ぬさを出す。明治に入つて鈴木忠孝の難桂園一枝に至るまで凡て十三種、歌は調べが第一だといひ、景樹の歌は俳諧歌めいてゐるといひ、歌は理るものでないといひ、いくら理るものでなくても、自分で選んだ歌集に「題しらす」といふ理窟はないといひ、此も細微に亘つた論議は見られるが、もと／＼論議には不得手な歌人のこととて、議論文としては見るに足るものは少い。段々煎じ詰めれば各自出發の主義の相違で、その主義は論理的の検討を経ることは少く、唯當初入門した師匠の首唱による關係なのが多い。

和 作例——官版議案録

□ 度量衡ヲ同フスル之議 (明治二年三月)

公議所書記 小野 清五郎

度量ノ二者ハ制度ヲ定ムルノ本原ニシテ、和漢西洋共ニ、之ヲ慎重スルハ勿論ナリ、本邦上代ノ事ハ置テ論ゼズ、方今專ラ用ユル處ニ二種アリ。一ハ鯨尺ト名ヅク、衣服ヲ裁スル等專ラ之ヲ用ユ。一ハ曲尺ト名ヅク、木匠等專ラ之ヲ用ユ。其他猶數種ノ尺アリト傳聞仕候。量モ亦甲州ニテハ武田氏ノ遺制ニ因リ、三升ヲ於テ一升トナセリ、右様度量ノ制一定セザルニヨリ、姦商等其時ノ便ニヨリ、或ハ曲尺ヲ用ヒ、或ハ鯨尺ヲ用ヒ、以テ人ヲ欺クノ伎倆ヲ施セリ。且物ニ依リテ、用ユル所ノ尺ニ不同アルハ、煩雜ト云フベシ。以來度ハ曲尺ヲ以テ正トシ、其餘ハ都テ廢棄シ、量モ亦通常ノ制ニ異ル者ハ一切廢棄可然ト奉存候。

メートル法實施の今日から觀ると、骨董的な内容かも知れぬし、文體の上から觀ても舊い候文だが、度量衡統一の必要を論じたものとしては簡明正確である。

□ 民會未可開論 (明治八年七月八日地方官會議日誌)

大山 綱良

伏シテ日本全國ノ形勢ヲ觀ルニ、東京首府ノ地ニ在リト雖モ、人情未ダ安寧ナラズ、生産未ダ繁殖セズ、風俗未ダ醇厚ナラズ、盜賊未タ衰止セス、而ルヲ況ヤ各地ニ於テヤ。故ニ民會ヲ開キ公議輿論ヲ采リ、以テ政ニ施サント欲ス、其意美ナラザルニ非ス、然レドモ方今民會ヲ開ニ於テ、其妨害極テ多シ。姑ク其大端ヲ舉ルニ、人民群衆シ嘷々紛論、首トシテ地方官員ノ賢愚政治ノ得失ヲ議シ、此ノ縣會ハ宜ク逐フヘシ、此判任ハ殺スヘシ等ノ事ヲ論シ、是ヨリ溯リ左右ノ大臣及ヒ參議ノ黜陟ヲ論シ、甚シキハ遂ニ共和政治ノ論ヲ主張シ、政府ハ人民ヲ妨害束縛スルノ地タルヲ唱ヘ萬口同辭必然ノ事ニシテ、國家壞亂遂ニ其後ヲ善クス可カラズ、縱令讒謗律ヲ用ヒ、日ニ人ヲ刑スルトモ制止スル能ハス。故ニ民會ヲ開クハ、他日人民開化進歩ノ時ヲ待チ、朝廷地方ノ官員協心同力、今日着實ノ政事ニ勉力シ

徒ニ文具ヲ事トセサルヘシ。

帝國議會開會の豫備として、地方の會議を公選の區戸長官にすべきか、公選の民會にすべきかにつき、地方長官六十二人が審議を擬らした時、最後に立つて朗讀演説をせられたのが此文で、略々當時本會の大勢を代表した趣がある。即ちこの文朗讀の後朱書投票によつて決をとつた處、民會尙早論三十九票、民會肯定論二十一票、十八票の差で前者の勝に歸した。

□ 文部省の學制改革案 (昭和六年八月九日、東京朝日三面上欄)

(附點は今便宜上つけたもの)

學制改革に關する文部省案は、在來の文部省臭味から多少脱却して、相應に活社會の意見を取入れたと認めらるべき跡が少くない。大體において賛意を表し得る。第一にこれによつて若干の年限短縮が期し得られ、第二、從來の通弊であつた一つの學校が、上級の學校への準備機關たるに偏したのが革められて、いはゆる完成教育主義が實現され、第三、特權主義が廢される結果、實力ある者に對して學校の門戸が開放され、男女就學の機會均等が認めらるゝ等が改革案の骨子である。

更にやゝ具體的にいへば、從來通り六學年制の小學校は、國民學校と改稱され、高等小學校・中學校・女學校・各種實業學校はすべて高等學校の名稱に一括整理されて、その構成内容に廣い範圍が認められ、青年訓練所と實業補習學校とは併合せられて青年學校となり、同時にその内容の充實が期待され、師範教育の組織が、從來の隔離主義より不徹底ながら解放される等の諸點が特に注目に價し、大體の方針は吾人平素の主張を合致するものである。たゞ一事の解し難きは、この改革案が、依然專門學校と大學とを別存せしめたことである。今回改正の主要目的が

ある種の學校に付隨せしむる特權の撤廢に存するにも拘らず、專門教育に依然大學と專門學校との二種並立を認められたのは、勢ひ兩者間に優劣の觀念を起さしめ、不自然なる學生分配の弊害を招くこと、今日と大差なきに至るを恐れるのである。しかも今回の改革案では、從來の高等學校は廢せられて、二年制の大學豫科が大學に付屬するであるが、專門學校の修業年限は最高四年まで行き得るのであるから、今一息で專門學校と大學とを合體することは、決して不可能ではない。上述の理由以外に、大學教育を實社會の要求に適應せしむる上から見ても、二者接近せしめて單一化するのを得策とする。

現在の通弊は、特權主義的組織のもとに、父兄本人の特權思想・虚榮思想及び投資的觀念が、無反省に大學教育を選び、ために腦力低く、研學心薄きものまでが相率ゐて大學の門にはしり、しかも在籍するだけで勉強もせず、時日を空費した上で、卒業後はたゞいたづらに知識階級失業豫備軍を増員するのにある。故に改革案の重點は當然大學專門學校の整理に置かるべきであり、殊に法文經方面の人文科學の方面にその必要を見るのである。しかるにこの方面ではただ高等學校廢止以外に、何等改革案の示す所無く、却て特權思想助長の一禍根たる二種並立を、そのまま認めたいのは賛成し難い。宜しく大學と專門學校との區別を徹廢し、兩者を通じて根本的整理を行ふべきである。たゞし二者を併せて單一化する場合には、別に大學院の組織や整備に、特殊の注意が拂はるべきは無論である。通常の大學はむしろ實際的のものとする代り、大學院こそは學術のうんぬんを極むる學府として、内容の充實を期する。これを條件として吾人は以上の説を主張するのである。

師範教育に關し、改革案が高等師範・文理科大學を廢止し、大學教育を終つた者を更に高等教員養成所に入所せしむることにしたのは、賛成である。普通の師範學校の方も、高等學校(現在の中等程度學校)卒業生を收容して、教育

するのを本體としたのは良いが、別に豫料を設け得ることにしたのは、多少現在の一部生制度に無用の秋波を送つた嫌がある。社會から隔離し、世間に通用せぬ教育を特に行うた觀ある過去の制度は、一切廢止することを希望する。要するに若干の點を留保して、文部省案は時宜に適せるものと思はれるが、懸念なのは其實現である。田中文相の原案を必ずしも固執せぬとの話も良いが、たゞ改革案の骨子に關して、必ず實現を期せではやまぬ執心と氣はくが無いのでは、從來現内閣の慣行であつた勞働組合法案や、選舉革正諸案の場合のやうに、たゞ論文を發表して一時の騷がせをする外、何の實効も擧がらぬであらう。今其疑ひは余程濃厚である。何分通過すべき關門が多い上に、すべて事物の刷新には頭をひねるのをもつて特色とする文政審議會や、樞密院が控へてゐる。その間には各種の運動が起らうし、現に高師・文理廢止に對して、早くも反對の聲は擧げられてゐる。しかも其幾多の難關を突破すべき肝腎の政府は、如何にひいき眼に見ても、もはや末期症狀を呈してゐる今である。本案の前途甚だ心細いといはざるを得ぬ、しかし教育改革は急がぬやうに見えて、實は何よりも急を要するのである。今回の案は制度に關してのたい一案に過ぎないが、更に討究を重ねべき實質的案は山積してゐる。それには文部省とか、現内閣とかの一局部に限らず、社會各般の勢力と意見とを參加せしめて、その合力を革新の拍車となさねばならぬ。もし文政審議會の改造が急に望めぬなら、一時的の組織でも良いから、國論を總合し、改革を促進せしむる機運が作らるるの急務なるを感ずるのである。

現今新聞・雜誌・論說の水準を示すものとして、此文を探つておく。新聞の諸説はその時代民衆の輿論の代辯ともなり、指導精神ともなる。文部省今回の案で、從來の楷梯教育主義を廢して、完成教育主義を採つたこと、教育に機會均等主義を取り容れたこと、劃一主義を廢して年限に幾多の分派を認め、地方の事情によつて、長短・伸縮自在ならしめた事に對する賛意、教育は國家永久の施設で、一人一黨の私すべきものでないから、此際各方面の知識を網羅して、慎重討議せよと謂つた論旨皆妥當である。

實をいふと學制改革は、なか／＼こんな狭い紙面では論じ盡せないものであらう。經費節約を前提としない立案たるべき事・從來幾多の考慮を壓搾して出來た現行法を廢棄するそれ以上の重大理田の考察・被教育者の心理生理・既往幾百萬教育者の體驗・國家が教育に手をつけるやうになつた本質的理由・この案自身が孕んで居る矛盾——即ち楷梯教育を廢止するのなら、高等學校は大學とすべきこと、門戸開放を徹底させるなら、大學院制度を刷新すべき事、他の農工商を早く専門扱ひにするなら、人の兒を教ふる教師を養成する師範學校は、むしろそれ以上早い時期から専門扱ひにすべきこと、門戸開放と云ひながら修業年限の著しく異なる同一階級學校卒業者が、次上級學校に入學する場合、依然として短期學校出身の生徒に向つて、門戸が鎖されるやうなことになること、高等學校を大學豫科として二年にするなら、大學は更に一年延長する必要あり、大學豫科にのみ一年短縮の必要を認めた根柢は那邊にあるか？ 然るに一方文部省の要求する各科教授要目は、現行の教授時數を以て不足だといふ者こそあれ、あり餘るといふ向の不平は一向聞いたことがないことなど——それは、何れその道々の人々によつて論議し研究せられることであらうが、差當り一般的に論ずるとして、先づこの論などが妥當な處であらう。(現内閣がいつまで續くか？ などは吾々の分としては、何の意見も立て得ないことだが………)

□ 京都の山水と日本の美術 (月郊文集二〇——一二四)

高安 月郊

杖を御幸橋の上止めて東を眺むれば、三十六峰春の如く、堂塔處々綠を洩れて、踞一帶の柳を曳く姿、あゝ京なかな、日本なるかなと云ひたき心地す。思ふに日本の特色は特に畿内にあり。畿内の特色は殊に京都にあり、京都

の特色は殊に東山にあり。東國の野趣、西國の海光、その中に固より快濶なる處、奇峭なる處乏しからねど、著しく外國の光景と異にして、尤も日本らしき様あるは京都なり。此山の温雅、此水の清淺相映じて、花に紅葉に、月に霞に、雪に時雨に、また外に得られぬものあるを覺ゆ。

されば奈良朝の古朴の人が、此所に遷りて漸く優柔となりしも宜なるかな。萬葉集の單純歌が漸く古今・新古今の纖巧となりしも宜なるかな。東大寺・三月堂の唐風が漸鳳凰堂・桂の御所の國風となりたるも宜なるかな。繪畫の如きは、此に至りて始めて發達したりといふべし。山水人を染めたるか、人山水を彩りたるか。土佐派の畫の如きは多く此山水より生れたるなり。彼の山は圓山なり、衣笠山なり、彼の水は鴨河なり、桂川なり、彼の人は鴨川に洗はれたる人なり、東山に育ちたる人なり。北宗の畫風入るに及んで暫超絶的山水あり。されど其外に溢るゝ風韻は、また東山高潔の氣より無意識に得たるものにはあらざるか。雪山の山は馬遠の山と同じからず、周文の水は夏珪の水と同じからず。相阿彌に至つては遂に日本的なり、東山的なり。山影水上を行く銀閣の朝夕は、確に彼の眼に沁みたるなり。狩野派全く日本的と脱化して、しかも土佐の優柔に對し、濃墨健筆、俊秀の氣を現はすは叡山や學びし、愛宕や學びし。永徳・山樂の華麗、桃山の眺、醍醐の春。探幽に至つて稍軽くなりたるは、江戸の士氣に移りたるなり。曾我の勁拔、鞍馬か宇治川か。光悅の高雅、正に其鷹峰の閑居と合ふ。宗達となり、光琳となりて、漸く濃艶となりたるは、洛中の紅塵漸其筆に沁みたるなり。されど一蝶等の輕浮無く、重厚なるはまた此所の特色なり。祐信は最市井的四條なり、五條なり、されど菱川派より、稍豊嬌なるも亦此所の特色なり。南海南宗を傳へてより、東山また高風あり、しかも月待山のあたりの趣もあらず、全く九霞の仙境か、否時に尙悠然として東山を見る面影あり。蕪村は稍市に近く、時に一乗寺の山下を叩けど、其得意の境は華頂山より南、圓山派、四條派、寫生を主義とすれば固より京的なり、東山的なり、圓山的なり。

京都の山水が日本の繪畫日本の美術に與へたる影響大なるかな。かの優美、かの艶麗、かの温厚、かの高雅、皆この山にあり、この水にあり。此等を日本美術の特色とし、長所とすれば、京都の山水は其特色、其長所を供したるなり、日本の美術は京都の山水より其特色を得て、又足らざる事無きか。京都の山水は日本の美術の故郷となり、資料となりてまた餘す所無きか。三十六峰秋老いとするの時、夕陽紅をさして紫溶けんとする暮色、誰かこれを捉へたる。巨擘の長堤月一方を照らし、霧一方をこめて半白く半蒼茫たる夜色誰かこれを捉へたる。四明の絶頂、雲頭を磨り、烟脚に這ふ所、金の光横さまに射る曉景誰かこれを捉へたる。嵯峨の大藪、雷電西に過ぎて、綠古宮に落つる雨景、誰かこれを捉へたる。數へ來ればいくそばくぞ。京都の山水狭しと雖も複雑なり。春と秋と、朝と暮と、同じ處一同じからず。千年の歴史これを染めて、同じ都、人幾變、一塊の小倉のほとり、貫之の筆執る處、公任の錦着る處、西行の櫻谷むる處、小督の琴ひく處、横笛の衣かくる處、勾當内侍の鐘鳴らす處、桃青の柿聽く處、涌蓮の歌口すさむ處、君平の墓探る處、長洲兵の寺燒く處、人と景と、頃と時と、これを調和せしめて一幅に收めたるもの抑もいくばく、今までの美術家は景を描きたり。時を描きたりや。朝と暮と色を別ちたりや。日と月と光別ちたりや。幾分かは別ちたらん。されど著しく別ちたるもの抑もいくばく。頃を描きたりや。代を描きたりや。風俗の調精しくなりたり、されど其代々を代表するものを捉へたるもの抑もいくばく。人を描きたり、情を描きたりや。活人の模寫漸く行はる、されど其常ならぬ情を捉へたるもの抑もいくばく。優美好し、艶麗好し、温厚好し、高雅好し、されど豪壯は更に好し、悲壯は更に好し、沈痛は更に好し。此等京都の山水に無きか。……蓋京都の山水は餘りに大なる感化力ありて、美術家を酔はしめたるか。あらず新なる目に見れば此中に尙雄偉あり、沈痛あり、悲壯あり、豪壯あらん。山水

に無くば天象にあり。光景に無くば人事にあり。現在に無くば過去にあり。此等は新なる美術を待つ。餘す所多きかな。足らざる所多きかな。

題目の通り、京都の山水と京都が産んだ藝術との交渉を論じたもので、稍感想論文めいて居るが、豊富な内容を能く簡潔に論ぜられてある。従来この種のものでは大抵、藤岡東圃博士の國文學全史、平安朝篇の序説を擧げるが、あれは山城の地勢と王朝生活の交渉を主にせられたもので、文章も少しく地味である。此は反覆法を連發して非常に元氣の宜い行論振である。その「同じ都人幾變一塊の小倉のほとり」に世々の文藝史、情美史を列擧する筆致は作者の最も得意とする處で、嘗て京都の大賀茂の流れを同様に作られたのを、或誌上で見て感心したことがある。而かも此論旨の新味はどこにあるか？ と見ると、末段の雄偉・沈痛・悲壯・豪壯はまだ従来文藝の士が、肚裏に消化されずにあるとした一段であらう。

第十四章 縮約と敷衍

(A) 縮約文

① 六千巻を一句に

昔波斯の王様は、出来るだけ立派な國史を撰ぶやうに臣下に命ぜられた。係の役人は全力を盡して、非常にくはしく馬一頭につき五百巻宛十二頭に六千巻を背負はせて献上した處が「斯う大部では朕一代には讀み切れないから、これもつと縮めるやうに」と仰せられたので、又々撰び直して献上する。まだ大きい。又縮めて奉る。まだ大きい。と

ど國王崩御の場に献つた國史はたつた一句

彼は生れて苦んで死んだ。

といふのであつたといふ。文章といふものは、この話のやうに之を縮めればつと短かくもなり、之を敷衍すればつと長くもなるべきだ。

② 手紙と電文

□ 父危篤のしらせ

「父はこの前、手紙で申しました通り、この四月以來とかく気分すぐれない勝でありましたが、常日頃心臓が弱いちだから、かうした場合には、殊に靜かにさせておく必要があるとの醫者の勧めにより、奥の八疊にすつと仰臥させたいくつな時には店先に來もさせますが、その爲めには特に手頃な肘かけ籐椅子をおいて、じつと掛けて居るだけに止めて、それこそ腫れ物にさはるやうにして居りましたので、四月・五月・六月に入つて、つひ昨日まではやつと安靜を保つて來ましたが、昨日の晩からバツタリ仆れて、急に發熱しましたので、大あわてに手當をして、只今のところやゝおちつきまして、此分ならば四五日は大丈夫な上に、年も若いことなり、或は恢復するかも知れぬが「それにして後日にうらみのないやう、近い御親類へは電報を打たれた方がよろしからう」とのことでしたので、取敢ず御しらせいたします。で、今直ぐ歸つていたゞかなくともよろしいが、萬事御整理の上こゝ四五日の中に御出發御歸國を願ひます。いづれくはしいことは後程手紙で申上げますが、取急ぎこれだけのことを御打電申上げます。

これだけのことを、遠方に就職して居る兄に電信しようといふ場合、こんな長い電報は大さうでもあり、費用もかゝるから、こちらの念さへとどいたら可いといふ最低限度に縮めて、

チキトクツゴウツケテカエレイサイフミとする。

◎ 講話をノートに書き取る事

學生生活に最も必要なのは、講義や講話の要領をノートに書きとめる底の縮約文の力である。これは知識的の事柄が多いのだから、普通の能力のある生徒なら充分注意して聴きさへすれば、さうむつかしいものでない。

(左の一篇は余がこれまで聴いた立志談の中で一番感銘深いものとして書きとめたものだから、少し長くはなるが全部を掲げて後、縮約の形式を説かう)

□ 立志奮闘談

小嶺 磯吉

(上)「私は明治十六年に國許を飛び出してから、今までにたつた二年と六ヶ月ばかり日本にゐただけで、あとはずつとあちらにをりました。お負けに生まれは長崎ですから、九州訛りが交つて、折角お話申上げてもお聞き苦しい勝だらうと思ひますが、どうか暫らく御清聴下さい。」

二「明治十六年、竹添公使が在任中、かの朝鮮事件の起りました際、私はあの地にゐまして、冬の寒い夜のこととて足袋をば二足穿くことと致しましたが、二足の足袋の片足を穿いて、片足に手をかけようとした時、件の大騒動が始まりました、劍光が閃き、彈丸が飛ぶといふ騒ぎ、私は命からく南大門から逃げ出しました。」

三「それから私は大島公使の勧めによりまして、天津に店を開いて商賣をやりかけましたが、當時この町に邦人の商店が私のをよせて、皆で廿三戸ありましたけれども、何れも支那人の商賣上手に負けて、次々たふれ、明治廿三年には奥村雜貨店だけが一つ踏み止つてゐるといふやうな、なさけない有様でした。」

四「それから私は芝罘に店を持ちました。當時こゝに居る邦人としては、三井物産の人が一人、神戸から一人、それから私とたつた三人ぎりでありました。當時、私は日本でとれた海産物を一先づ支那へ取寄せて、支那から更に朝鮮に出すことを思ひついてやつて見ましたが、實力不相應な大風呂敷をひろげたために、物の美事に失敗してしまひました。」

五「二度と商賣に手を出さうに資本はなし、からだ一貫で儲かる仕事と申せば、勞働でありますから、そこで一つ南洋へ行つて見ようといふ氣になつたのです。」

(尤、その前に榎本子爵から、フランスの事情を聴いて、巴里留學を思ひ立ちましたが、よしました)

六「そこで一日八十錢のメキシコドルを拂つて、獨逸汽船に乗つて香港へ参りました。船床に着くと上野領事がつひ四五日前まで御滞留であつたとのことで、まだそれ以外の邦人も大分居りましたが、わたしはそれ等の人に逢ふのも面目なし、それ等の人に無心をいつたりする氣もなし、旁々ロナといふマレー人の宿に投じました。懐中唯二十錢あつた中十八錢を拂つて残りが二錢——例の穴のあいた寛永錢です。それがまたどうしたことか、その中四厘なくして僅に一錢六厘しかありません。遠い異國に來て在金がつた一錢六厘といつたら、そのみじめさは想ひやられませう。顔色憔悴形容枯槁といつたなりで、街路をトボ／＼してゐますと、在留邦人がそれを見て、「どうもあんな人間がうるついでゐては我々同胞の名譽に拘る」といふので、協議の上、八人の方がめい／＼醵金をして、私のところへやつて來て「失禮だがお苦しいやうだから、これをお取り下さい。ホンの吾々の志ですけれど」といはれます。私はそれに對して嬉し泣きせんばかりに悦びましたが、悦ぶと同時にそれを斷り、斷ると共に大きな氣炎を吐きました。「皆様の御親切は重々感謝いたします。けれども考へて見ると、それをお貰ひすることはどうあつても出来ません。私に

は五人まで兄があります。又姉もあります。今こゝで私が御厄介になりましたならば、それ等の兄弟にまで肩身せまい思ひをさせなければならぬ。私はそれが忍びませぬ。のみならず私も今一度、長崎の大道を大手を振つて歩きたいと思つてゐますから、折角の御好意ですがこれは御返し申します」といつて起つて断りました。

(下)「其頃問屋にはオースタリヤ眞珠採貝の傭員募集の廣告を取次いで居りました。よし来た——といふもんで、私は早速應募致しました。すると厦門から同行した連の男も「どうかあなたと一緒に働かせてほしい」といふことで、二人で行くことにしました。初任は月俸二ポンド(日本の廿圓)で、潜水器をかぶつて海底に入るやうになれば、月何百圓といつてとれるとのことでした。併し月廿圓といふのは、當時にあつては少なからぬ待遇で、その頃内地では巡査が六圓か八圓、部長でやつと十三圓位のものでした。」

二「明治廿三年の十月に香港を出發して、二ヶ年間の契約で傭はれて行きましたが、行つて三月程たつと正月が来て、皆は娯樂場へ詰めかけて、いろんな遊びをしてゐますやうですから、どんな様子かと見ますと、殊に盛んなのは球突で、五十圓・百圓といふ大まいのお金をかけて、事も無げに打興じてゐますからびつくりしました。そこで吾々も何かして遊びたいと思つても、お金がありません。来る時に三ヶ月分前借をしましたから、その流で「もう三ヶ月分貸して下さい」と申しますと「社則としてはそんな事は出来ない」といつて社長が可きません。「ぢや、前には三ヶ月分貸しておきながら、こんどはそれを許さないといふのはどういふわけです」つて問ひますと、社長は「前のは支那渡航等の費に宛てる爲に社則の認めてゐることだけでも、入つた以上は、一ヶ月分だけしか前借は出来ないことになつてゐるんだ」といひます。それを無理矢理に頼んで、やつと二ヶ月分四磅を借りて、とても人並に正月の歡樂をとることは出来ないから、「どうだ一つ西瓜でも買つて食はうではないか」といふもんで、果物屋に行つてワンパウン

ド(十圓)を出して、西瓜を取りまして、おつりをくれることと思つて、立つてゐますと主人が「君はどうしていつまでもこゝにゐるんです」つて訝ります。「おつりは」ときくと、「あれで丁度だ」エツ」と謂つて、あいた口がふさがりませんでした。九州あたりでは西瓜といへば大抵一個が十錢か十五錢位のものですから、澤山つり錢があると思つたのに、一個が十圓とは餘りひどいと思ひました。今でこそ大都會では、一個二十圓の西瓜もあることですが、あの時分に十圓の西瓜といふのは、實に破天荒の高値であります。」

三「連の人はホロツとして「吾々は一ヶ月働いて、こんな西瓜をヤツト二個貰ふのかと思ふと實に馬鹿々々しい。もうこんな仕事はよして、どこか外へ行きませうや」と申します。私はそれには「否」と答へました。「これだけ生活の程度が高いのだから、金も澤山に集まつてゐるに違ひない。さすれば腕次第・働次第によつて幾らも儲かる道があるといふもんだ。寶の山に入りながら手を空しうして歸るなんて詰らんぢやないか」といつて此迄以上にせつせと働いてゐました。社長の方では私ども労働者風情がと馬鹿にしてゐたやうですが、こつちも向ふを馬鹿にして「今に見ろく」と思つてゐました。當時内地から安川安太郎といふ方が来てゐられましたが「ナント日本人中で、小嶺君程眞珠を昇いだ人は無からう」といはれましたが、實にその通りで私は馬鹿にされつゝ馬鹿にして、せつせと働いてゐたのです。

四「當時の潜水師といつたら、それはく威張つたもので、英國官憲の保護で、重罪まで免ぜられることになつてゐましたので、それを笠に着て仕たい三昧に威張つたものです。隨て私等労働者にとつての唯一の希望としては、一日も早く彼の威張ることの出来る潜水師になるといふことでした。處が幸かな私の主人は、ひどく私を信用してくれまして、「小嶺は決してクリーリマンのタイプぢやない。労働者には惜しい人間だ」といふので、渡航後僅か五ヶ月半

で、船一艘を任せられ、かの希望の的となつてゐた潜水師に抜擢してくれました。これは恐らく探貝所始まつて以來の新記録で、木曜島あたりにゐる邦人一般に羨まれました。今も紀州の西牟婁郡上野村には、その事を記憶してゐる古老の一人二人はありませう。

(眞珠の価格は物によつて不同ですが、大抵一個が二百圓から四五百圓乃至一萬圓位でありまして、その頃平政平といふ人が、英國船コンボイに船載して、ロンドンの市場に賣つたのが四萬二千圓で、これは珍しい獲物だといはれてゐました。そんな大したものでもなくとも、可なり収入になるのですから) 私どもは毎日午後二時から日暮まで三四時間働いて二百圓位の俸給を貰つてゐましたので、幾らか貯蓄も出来るやうになりました。

五「その貯蓄が六七千圓に達した頃、やめて獨立して船一艘を建造しまして、信州の松岡浩二といふ人と聯合で巡航視察を始めました。此松岡といふのは榎本子爵家に書生をしてゐたこともありまして、大島男爵へも出入の人でしたので、色々の關係から心やすくなつたのです。此より先、明治廿四年には、軍艦の比叡が遠洋航海をしてやつて來まして、三宅雪嶺・志賀重昂などいふ先生にもお目にかかりました。其頃私はその後を慕つてシドニーに行きまして、そこで上陸したいと官廳に頼みましたが免されません。其時役人の一人の話に「このオーストラリアといふ處は、面積は日本の三十倍もありながら、人口はたつた四百萬程しか無いから、事業は幾らもあるが、英語が話されなくては駄目だとの事でした。」

六「私は已むなく上陸を中止して、此度は一つ木曜島に行つて見たいと思ひましたが、それがまたなか／＼の遠距離で、容易に行かれさうにもありません。そこで明日比叡艦が木曜島に向つて航行しようといふ前夜、私は公園で夜あかしをして、いざ拔錨といふ間に泳いで行つて軍艦に飛びつき、自分の切望を述べてやつとのことで、同乗を許されて、それで日頃の望みの一つなる木曜島の視察をすることが出来ました。」

七「此頃から私は榎本子爵の御同情を得まして、その添書を戴いて、友人の松岡君を代理として、帝國教育會長辻男爵に南洋の有望なものと、それについて企業上の援助を頼むことを申してやりましたところ、辻男爵も非常に御同感で、早速御令弟の辻謙之助様と申して、當時東京の師範學校長をしてゐられました、その方を退職させて南洋視察に出かけるやうにおすゝめ下さいました。明治廿七年、月は確かに記憶致しませぬが、改めて辻様と私とが、木曜島を巡航して精しく視察いたし、二月の廿二日といふに此島を出て歸途に就きました。香港の一等旅館の一室に仰臥して快談放笑するものは、堂々たる日本紳士辻男爵の令弟と、往時無一文でこの街を徘徊した私とであります。あの時救ひを受けなかつた私は、今受けなくてよかつたといふことをしみじみ感じつゝ、「心廣く體胖かに」道中事無く歸國して上京致しました。その時には榎本子爵も、大層お褒め下さいました。辻男爵から濶澤男爵に説かれ、それから關・木谷・中澤といふやうな御歴々が御賛成下さいまして、茲に「日興貿易株式會社」を組織することになり、更に前田正名氏の援助を得て、あらゆる有志に勸説を試みることにりました。」

八「が、如何にせん、時尚早く、人尙幼くしてちつどの理解も同情もなく、數多勧めました中で、快く賛成してくれたのはたつた二三名だけでありました。勧めましたのは大抵政治方面の人々殊に現衆議院・貴族院議員の方々でしたが、當時私の眼に映つた議員は、甚失禮ですがまるで子供のやうに思はれました。茲にその一例を申しませう。名前もちやんと私の胸にはありますが、其人の名譽の爲に今は申しますまい。とにかく私が参りまして、熱心に南洋のお話をしますと、其人はボケタやうな調子で「ニューギニヤといふ島は臺灣位もありませうか」つていふのです。どうです皆様臺灣を幾つよせた位のニューギニヤを捉へて、臺灣位とは何のことです。わからなけりや小學校の子供に聞

うても知つてゐませう。私はこんななげない人間が、もし郷里の者なら木刀でもくらはしてやりたい程憤慨しました。こんな次第で折角企圖した五十萬圓の會社は、六分迄證據金を入れて、解散の悲運に陥りまして、私は再び元の無一物になりました。併し外形は無一物となりましても、精神には無限の財を貯へてゐるわけですから、私は少しも失望しませんでした。

九「明治卅年の十月、空拳瓢蓬の身は、再び神戸を出發して木曜島に向ひました。その頃の濠洲は最早日本人排斥の風が大分強くなつてゐました。これは日本人を嫌つてと申すよりは、寧ろ恐れての排斥なのです。そこで私の思ひますには、蘭領ニユーギニヤ。ニユーギニヤは英・獨・蘭の三國の殖民地であります。蘭領ニユーギニヤには、まだ日本人の足跡はついてゐないから、一つあの島に先鞭をつけてやらうと、そこで知り合の一英人に、年二割五分で金を二萬圓借りて、それで船を造り、明治卅一年一月廿九日、一行十七人の乗組で、木曜島を立ち、セレベスの方へ廻つて、普く津々浦々を見巡つて、遂に蘭領ニユーギニヤの西海岸に着きました。見ると其海岸は幅一尋程で、帶のやうに長く、磯際に鹽が半分、水が半分位で白く粉をふいてゐます。そして潜水器を入れて見ますと、下は牡蠣が無數に重り合つて歩けないのです、私は早速我日本海軍に向つて、其事を通報しておきました。グル／＼と上陸の出來さうな處を探しつつ見まはつて、二ヶ月許してからカツバの港へ着きました。こゝは開港後二ケ年位で、市の體裁も稍整つてゐました。」

「〇「常時ドヴァイランド和蘭の定期航海船が亡くなりまして、乗組員は土人の救済を得てやつと生きてゐました。そこで和蘭政府は私に向つて、之が救済方を依頼して來ましたが、私は之を快諾して、種々なる困難を排して、無事それ等難船者を連れて歸りました。當地の知事にもお目にかかりましたが、其知事は榎本子爵の舊い寫眞を示して、あなたは此方を御存じですかつて聞かれましたので、見ると、意外にも、子爵がまだ髭を結つてゐられる頃のお寫眞でしたので、恩人でもあり、今昔の感に堪へないものがありました。和蘭政府は非常に私を優遇してくれまして、海岸凡ての探員を特許するは勿論、殖民地到る處の税關では無検査で通過させること、並に附屬の島地蘭領に行けば、土人は必ず敬禮せよとの證書をも交附してくれまして、現にその證書はこゝに持つてをります。和蘭語で書いてあります。」

「一「それから明治卅四年には、セレベス島附近をも調査いたしましたして、東部の獨逸領を視察し、蘭領のタナベといふ島に上陸しました。此は小さい島ではありませんが、文明の程度から申しても、國産の點から申しても、確にジャバ以上の價値があります。ずつと以前には邦人が上陸した記録もありませんが、私が參りましたのが、丁度三百十七年目だと申します。處が私より六ヶ月前に、日本の巖島・橋立の二艦が碇泊してゐたといふ知事さんのお話でした。」

「二「その後更に獨領ビスマルク島に渡り、政廳の懇望により、半官半私の面白い生活もいたしましたが、長くなりますので省いておきます。とにかく斯様にして、微力ながらも自分の腕一つで一步々自分の運命を開拓し、今日では全く官憲の手を離れて、木曜島に約一千町歩の私一個人の探員所があり、その又附近の島嶼中、主要な處々に私の一手經營權に屬してゐる所がありまして、先づ自分の勞は十分に酬いられてはをりますが、この年で樂隠居するにはまだ早いですから、今後は益々この方面に邁進して、我内地の同胞と共に、劫初以來未だの寶庫とも謂ふべき、この南洋の富を我邦に吸収せしめたいと心掛けてゐるのであります……。」

（以下は南洋土人の人情・風俗について趣味深い話があつたが、この文題とは無關係だから割愛する）

以上の立志奮闘談を聴きつゝ、ノートに要點を書くにはどんな程度にするかといふに、

(上) 流 浪

- (一) 冒頭、十六年出郷 今年までの中日本には二年半 長崎生まれ 訛り
- (二) 十六年朝鮮事件 足袋はだして逃げた
- (三) 天津で商賣 失敗 二十三年には日本人の店二十三戸の中唯一奥村雜貨店のみ
- (四) 芝罘 邦人三井物産の人、神戸の人、余と三人
海産物、日本——支那——朝鮮大風呂敷をひろげて又々失敗
- (五) 南洋の勞働を志す
(巴里留學は中止)

(六) 香港に行く(獨逸汽船一圓八十錢のメキシコドル)

四五日前まで上野領事滞在

マレー人(ヘロナ)の宿に泊る 二十錢の中十八錢宿賃……一錢六厘 在留邦人の同情 斷る 五人兄弟

(下) 南 洋

(一) 眞珠採貝應募 厦門から同行の男も

初任二磅 潜水 何百圓 (その頃巡查六圓——八圓、部長十三圓)

(二) 廿三年十月 香港發 二ヶ年の約

正月 球突 五十圓、百圓の賭

二ヶ月分前借 西瓜十圓(九州十錢——十五錢、今日では廿圓のもあるが)

友だち失望 余は益々發奮

馬鹿にされつゝ馬鹿にして……

安川安太郎氏の評

(三) 當時の潜水師

五ヶ月半でなる 紀州西牟婁郡上野村の人が知つてをる(眞珠四五百圓——一萬圓、平政平氏英船コンボ)

でロンドンに賣つたのは四萬二千圓)

午後二時——日の暮 三四時間 二百圓位

(五) 六七千圓 船一艘で巡航視察

信州の松岡浩二氏と聯合(榎本子の書生、大島男の出入)

廿四年比叻艦 三宅・志賀先生にあふ。

シドニー 上陸不許可 「濠洲面積日本三十倍、人口四百萬、英語が必要」

(六) 木曜島 比叻艦まで泳いでいつたのも

(七) 榎本子の同情、松岡代理辻男に令弟辻謙之氏(東京師範校長) 廿七年二月廿二日香港の一旅館

辻男より澁澤男に 木谷・中澤 「日墾貿易株式會社」 前田正名氏の援助 一般に勸説

(八) 一般の無理解——議員 子供のやうな ニューギニヤは臺灣位か 五十萬圓の會社 六分まで證據金

を入れて解散 もとの無一物なれども心の富

(九) 卅年十月木曜島に

英人に年二割五分二萬圓借る 船を造り蘭領ニユーギニヤに行く 西海岸幅一尋鹽が半分、下はカキが一杯 二ヶ月後カツバ港 開港——二ケ年

(一〇) ドヴァイランド和蘭の定期航海船 乗組員救済を頼まれて果す 知事榎本子の寫眞 政府沿岸の探貝 特許 税關無検査 土人敬禮證書こゝに

(一一) 三十四年東部獨領視察 蘭領タナベ島に上る——ジャバ以上 邦人三百十七年め 六ヶ月前嚴島・橋立 (一二) 獨領ビスマーク島 半官半私の面白いくらし 木曜島に一千町の探貝所 主な島に一手經營權 今

後もますく——

これは要項書きといふもので、原文の約五分の一位になつてをる。これを簡單につなげば縮約文になる。

④ 叙情文の縮約

叙情文になるとこの縮約は一寸面倒になる。が、それとも一つ一つの心持とか、感想とかを單位として、區切つて前と同じ要領で縮めれば、どうにか縮約されるものだ。今わかり易いやうに、原文と縮約文とを對照しておく。

□ 小さき者よ

原文

十分人世は淋しい。

私たちは唯さういつて済してゐる事が出来るだらうか。お前たちと私とほ血を味つた獸のやうに、愛を味つた。

有島 武郎

縮約文

愛を味つた吾等父子は、其愛によつて、せめて御互の周圍を淋しさから取りのけよう。

行かう。而して出来るだけ私たちの周圍を淋しさから救ふために働かう。

私はお前たちを愛した。而して永遠に愛する。それはお前たちから親としての報酬を受けるためにいふのではない。お前たちを愛することを教へてくれたお前たちに、私の要求するものは、たゞ私の感謝を受取つて貰ひたいといふ事だけだ。

お前たちが一人前に育ち上つた時、私は死んでゐるかも知れない。老衰して物の役に立たないやうになつて居るかも知れない。併し何れの場合にしろ、お前たちの助けなければならぬものは私ではない。お前たちの若々しい力は、既に下り坂に向はうとする私などに煩はされてゐてはならない。

斃れた親を喰ひ盡して、力を貯へる獅子の子のやうに、力強く、勇ましく、私を振り捨てて人生に乗り出して行くが いい。

小さき者よ。不幸な、而して同時に幸福なお前たちの父と母との祝福を胸にしめて、人の世の旅に登れ。

前途は遠い。而して暗い。併し恐れてはならぬ。恐れない者の前に道は開ける。行け。勇んで、小さき者よ。

(小さき者よ)

⑤ 縮約文の要領

縮約文は前數例でも略わかるやうに、大體は電文を書いたり、散文を韻文譯にしたり、講演の要領をノートに書きとめたり、封書にする手紙を端書で済ましたりする場合の要領で、原文の主要部分が、小さいなりに皆とり入れてある

私は今後とも未永くお前たちを愛しよう。けれどもそれは老後面倒を見て貰う爲めではない。愛する者によつて愛することを學び得た私の感謝に過ぎない。

お前達が大人になつた時分に私がどうなつて居ようとも、それはお前たちの顧る必要のないことだ。

見方によつては、幸とも不幸とも觀られる、亡き母と此父との祝福を受けて前へくと猛進せよ。突進せよ。

恐れない者の前にのみ道は開けるのだ。

やうに工夫すべきである。原文の手をとり、足をとり、胴をとり、頭までもとり去れば小さくはなるが、それは削除といふもので、縮約にはならない。

君が代は千代に八千代にさざれ石の いはほとなりて苔のむすまで

といふ一首を「苔のむすまで」とすれば三十二分の七になるし、「むすまで」とすると三十二分の四に、「まで」とすれば三十二分の二に、「で」とすれば同じく一になるが、それは縮約ではない。削除である。「天皇陛下萬歳」などいへば詞形は遠いが、意味は完全な縮約である。尙この文について必要な注意を補ふと、

- (1) まづ本文を精讀して意味を正しくとる。
- (2) 文段を切る。
- (3) 各文段に適當な小題目をつける。
- (4) つけた小題目又はその小題目を中心にした短句をなるべく手短かにつなぐ。
- (5) 之を幾度もよんで文の中心生命を損ねない範圍に於て詞を省く。
- (6) 主旨は決して省いてはならない。
- (7) 副想は冗長になる場合には省いてもよろしい。

(B) 敷衍文

【甲】 一般の敷衍文

昔の漢學塾の師匠の中には、論語を講義して「子曰」の二字について、十日も説明した人があるといふ。私も嘗て「日本文學史」を著して、その第一章緒言中「國文學の特質」といふ項目において、一ページ足らず論じたことを更に

敷衍して一千三ページにして「國文學概説」と題した。その頃、私は「自分としては敷衍はさほどむづかしくはないが、寧ろ縮約の方が困難だ」と思つて、自分の研究を結晶させると同時に、文の練習のつもりで始めの「日本文學史」七百四十一ページを縮めて百一ページにして、「國文學史提綱」と題して公にしたことがある。實際文章といふものは之を延ばせば數千萬言ともなり、之を縮めれば一句に盡きるといつた風のものである。

● 京の春に桃割ゆへる

京の春に桃割ゆへるしばらくを よき水ながせまろき山々

増田 雅子

如何なる言葉をもつて、「少女から處女となりゆく」有様を表はさう。忽ちの間に黒髪は艶やかに延びまさり、唇は紅にうらほひ行き、瞳は輝かしく、此まで見ぬ彩を見せられて来る。身はさながらに濃やかなる夢を盛つた器とも思はれる。

このやうな美しい人の、西の都に住んで居、春の日、髪を桃割に結ひかへたが、時候がらとて新粧をしたので氣改まり、そらにもさまよひ出で、いつか流れの岸にまで来た。そして水に映る我が姿を打ち眺め、思はずも微笑をこぼした。そして目もて水上を辿つたが、そこには優しい形の山々が打ち連なつて居る。その山々も水の流れる。凡てが春の光の中に包まれて、長閑に駈け行くやうに思はれる。

處女は我が思ひと、我が姿と、我を取りまく山水とが一つものとなつて、其の間には何の差別も無いやうに感じられた。そこでわれかのやうに、山よ。我が爲めによき水を流せ。水よ。我が姿を美しく映せと呟いたといふので。

(姫河原無鳴 新派和歌評釋六九—七一)

僅か一首の和歌について、作者がこの詠を産む時の心持を段々かみわけて行つて、その意のあるところを敷衍したも

ので、近頃この種の取扱を「鑑賞」といつて居る。事實この敷衍文は、それが文學的作品である場合には、作者の作意に立入つて、そこから情趣を深くも廣くも描き示すものだから、鑑賞と相似たものになる。「鑑賞」については次の章に特説する。

⑤ 十五代將軍

高濱 虚子

私は其句の批評を終ると共に、今度は古人の句などを引いて、俳句とはどんなものかといふことに就いて少し許り話をした。其中に蕪村の、

一「牡丹切つて氣の衰へし夕哉」

といふ句の解釋に及んだ時、公（慶喜公）は深く感動された様子で、「成程よく情をつくいた如何にも面白い句ですね」と言はれた。さうして斯ういふことを附加へ言はれた。

「切らう／＼と思ひながらも、切りかねて居たのを終に思ひ切つて切つた。そこでがっかりしたやうな氣の衰へを感じたといふ意味になるのでせうな。たい夕暮に思ひたつて切つたといふのではなくて、朝から切らう／＼と思つて夕ぐれになつて漸く思ひ切つたといふ、その心持が面白い」とどつと首をかしげて咏歎してゐられた。私はそれより前から私の拙い俳話のうちに、時々言葉を挿んで反問される。其の公の明敏の頭腦にひそかに敬服して居つたのであるが、此牡丹の句に就いての解釋の如きも、私の言葉の足らなかつた所を補はれたその聰明に唯々推服した。……（中略）

私は既に句を示された以上、如何に將軍様の句でも其月並調を其儘認めるわけには行かなかつたので、

「失禮でございますけれども、かうお直しになつた方がよろしからうと考へます」と言つて次の通り紙へ書いた。——私は「遊ばせて」といふ言葉をまだ使つたことが無かつたので使用しなかつた。

二「我爲めの五月晴とぞなりにける」

老公は眼鏡をかけて居られなかつた。其私の書いた小さい字を、慶久公が傍から受取つて「我爲めの五月晴とぞなりにける」と朗吟して老公の顔を見上げられた。老公は眼を瞑つたまゝ、それを聞いて居られたが、聞き終つて後何とも言はれなかつた。仲博侯初め席上の人々が、皆口の内此句を吟味しつゝ一様に老公の顔を見守つたが、老公は矢張眼をつぶつたまゝ何とも言はれなかつた。牡丹の句が老公の心を感動せしめたのと異なつた意味で、この瞬間一座の人の心持が、又多少の緊張を覺えた。……（中略）

「牡丹切つて氣の衰へを感じたといふことが、果して大政を奉還した慶喜公の心の底の深い或物に觸れたのだと考へなくとも、また大政を奉還した彼の心持が五月晴の句で言ひつくせたもので無かつた」と言はなくとも、此半日の將軍様の面影は、百卷の歴史をあさるよりも、より以上の維新史の或物を私に物語つたのであつた。（十五代將軍、明治大

正文學全集二一、三二七——三三四）

右のうち一の句は慶喜公の語がよく敷衍されてあるし、二の句の敷衍はされてないが、末の附點の作者の語から推して、略次のやうにならう。

長らくの間じめ／＼とした五月雨つゞきであつたが、今日は珍しくも晴れあがつて、これまでの天氣が天氣だつたから、一段と心地のすが／＼しさを覺える。お負けに長らく未解決のまゝに、なやみつゞけた我身の上の問題も、さつぱりとかたがついたので、この身の境遇のおもひなしで、さながらこの五月雨のすが／＼しさを身一つに占め得たかのやうに思はれる。

⑥ 敷衍文の要領

敷衍文の要領は作者の胸の中に、ほぐれ勝なる一かせの絲が入つてあるのを、一筋々々丹念に分けて、誰にも分るやうに手ぐり出すといふことで、これが爲めには、その作品に對して十分な理解を持つた上、それを説きあかす用意に於ても、普通の説明文以上の技巧をもち、尙且つ自分のこれまでの生活の凡てをしらべて、そこから見た味ひを結びつけるといふにある。割算のよく出来る人が、掛算も達者であるやうに、縮約文の上手な人が、敷衍文も巧な場合が多いのは、之等に必要な素養が共通して居るからである。だからこの文の綴文力をつけるには、縮約文を達者にするのも一つの良法である。次には講讀の時間に於ける先生の説明振をよく呑み込むことである。誰が説いても同じであるべき説明も、實は説く先生それぞれ特有の型があつて、習ふ生徒は唯その説明の内容だけを聞き覚えようとかゝるものだが、尙一步進めて、その説明振をも我ものにするやうに努めねばならぬ。其他は説明文と同じ注意を用ひればよろしい。

【乙】鑑賞文

鑑賞とは「美」を味はへる趣味的な心の作用をいふ。諸子が繪畫の展覽會を見に行つたり、音樂會を聴きに行つたりする時は、即ちこの鑑賞生活を營んで居るので、作文の時間に他の優秀作品を読みきかせられたり、板上に示されたりするのを、聴き、讀みするのも、この生活に近い。又これ等繪畫・音樂（彫刻・建築・劇・文學等）などの人工美でなく、山水自然の美景をめめて、あゝと歎息する瞬間には矢張この生活の營爲が見られる。で、鑑賞文は取も直さず感想文の一種である。唯感想となると、一般の事物について厭なこと、不快なこと、憎らしいこと、腹立たしいことをも内容にするが、鑑賞文では人工又は自然の美物について好きなこと、愉快なこと、愛すべきこと、慕はしきことなど光明な積極感のみを内容とする點が違ふだけである。

鑑賞生活は、吾々の心を慰め、淨め、高め、深める生活で、この生活の多い人は幸福な人と謂つてよろしい。自分の對象となる物・景・人に對して、その長所・美點を見つけて、その楽しみに浸らうとするその心は、ともすればそのあらをあなぐつたり、短所・弱點をあげたり、否誇張をさへ敢てして、自分で自分の墮落する穴を掘るやうな心に比べて、遙かに高尚である。芭蕉は終生人の美點にのみ眼を置いて暮らしたといふが、これが芭蕉の俳句にどれ程幸したとかわからない。

だが、併しこの生活を文字化した鑑賞文となると、たゞ無上に感心するだけでは無意味で、どうしてもその感心する心持を内部から、立體的に盛り上げ上げる必要がある。

●ミレー禮讚

有島 武郎

「日の暮れに、アンジェラス（時の鐘）を鳴らさないやうな時世が來たら、ミレーのアンジェラスの畫は何等の興味をも引かぬものとなるであらう」と評した人があるさうだ。さうだ、實際傳説といふ背景をその人の作物から除き去つてしまつたら、紙屑と同様な價值より残らない作品は澤山あり得る事だ。然しミレーはさういふ運命に遇ふ爲めには、少し深過ぎる。アンジェラスの鳴らなくなる時の絶對にないのを何うしよう。寺院はこぼたれる時が來るかも知れない。釣鐘は鏝かされる時が來るかも知れない。然し晩鐘といふ題によつて象徴され、暗示された大自然のアンジェラス——若く睦まじく勇ましい夫婦が、一日を顛顛から血の滲み出るまで働きぬいた夕暮れに、静かな空に沈んで行く夕日を感じと満足とを以て眺めやる瞬間に、二人の心の中に思はずしも湧き起る祈念と、相愛とのアンジェラスは永久に人の心から鳴りやまぬであらう。（有島武郎全集第二卷一二四）

これはミレー禮讚の一部、「晩鐘」の鑑賞だが、氏はかういふまでに、ミレーが苦いみじめな生の體驗者であること、田園生活に對して、深い理解と熱い愛との所有者であることを詳述し、尙且つこの繪の描かれた前後の事情にまで説き

及んで居るから、この鑑賞には間口も、奥行も陰影もあつて立體的なものとして讀者に迫つて来る。(口先だけの一面しか持たない平面的なものでなく)

㊦ 作者の想定

立體的といふことが正しい鑑賞の唯一條件であつて、又これ以外別に必要な心得もないが、尙この立體的の主内容をなすものをいへば「作者の想定」といふことがある。物をほめるといつても、作者の作意に當て嵌らないほめ方では可けない。この點に於て、敷衍文とも交渉がある。かの山出しが令嬢の寫眞をほめて「マア御美しくいらつしやること——丁度昨日お供をして見せて戴いた平家蟹見たいですわ」といつたところが令嬢は酢を飲まされたやうな顔をしたといふ笑話があり、二つ三つの乳香兒は門に立つ乞食にでも「へ、アン」とお辭儀をするものだが、美の鑑賞に斯うしたことはないだらうか？

明治維新の始め歐米崇拜の風潮が極度に達した時、我邦在來の文藝美術は二束三文にけなされ、その結果として抱一の屏風を十圓に賣つて、ザラにある靜物の油畫をその倍にも三倍にも高價で買つて、得意がつて居る人が出來、遂には我國の古名畫で、眞に價値あるものは外國の美術館に行かなくては觀られないやうな事になつた。これは令嬢を平家蟹みたいたとほめた山出しの下女と同じである。

㊧ 毘沙門堂の奉納句

柳澤淇園の雲萍雜誌を見ると、其の中に或村長の

五月雨や年中の雨降りつくし

といふのがある。それをさるお公卿様が見て、ひどく感心して作者の村長を呼んで「上京の序もあらばまろが方へも寄

るやうに」との仰せに、その村長は非常に恐悦して、間なく上京。早速そのお公卿様のお屋敷へ伺つてお目通りを許され、談話はいつしか例の發句のことに落ち「一體どういふつもりであの句をよんだか」とのお尋ねに、村長は「左様でございます。別に仔細といつてはございませんが、唯五月雨が昨日も、今日も、明日もといふ風に降りつゞきますので此分では一年中降る雨を、皆降つてしまひさうだと存じて

五月雨や年中の雨降りつくし

と工夫いたしましたのでございます」とのことに、お公卿様はハツと興さめ顔で「そんなことだつたのか、まろは又五月雨の降りみ降らずみ晴れ曇り定めなき趣は、冬の時雨にも似て居るし、銀絲のやうに雨煙る趣は、春雨とも近いものがあるし、頻つて地にふりそゞ勢は、夏の夕立にも近いので、一つの五月雨にして、よく三季の雨の情態を兼ねてゐるから、

五月雨や年中の雨降りつくし

とは、うまくよんだものだと思心したのだが………」といつて、

場面が急にしらけて、挨拶もそこ／＼辭して歸つた」とあるが、このお公卿様の鑑賞は、自身文學趣味の高いことを示しては居るが、作者の作意を買ひかぶつた點から觀ると、二つ三つの乳香兒が乞食にお辭儀したのと同じ格である。

㊨ 歸帆

(ヤコブ・マリス作、アムステルダム美術館藏)

荒木季夫

(前略)

……ヤコブ・マリスは晩年カルスタッドの漁村に移り住んで、死ぬまで其所の質朴と風俗を寫してゐた。

此の畫は、彼の傑作として誰も先づ第一に擧げるものである。これは自然と人間生活の或る嚴肅な光景を描いたも

ので、憂鬱な而かも壮大な北海を背景として、そこに住む漁民の自然と闘つて、生きてゆく悲壯な心持をあらはしてゐる。嵐の収まつた後に、荒海を渡つて歸つて来る漁船、その安否を氣づかつて濱邊に出迎へる家族の者、そこには一脈の哀愁をそよる抒情詩が、それを表はすに應はしい粗い筆觸を以て、綴られてゐるのである。(世界美術全集第三十卷概説及解説四六)

これは本來は説明文なのだが、こゝに書き抜いた分は立派な鑑賞文である。若又この繪の中の船中の漁夫を主人公とする左の一篇となる。

□港 入

一、夢にのみ見し山川も、

あけくれにしたひし家も、

まのあたり近く迫りぬ。

かもめ飛ぶ海をすべりて、

船は今靜かに歸る、

懐かしき故郷の港。

二、はやて吹くやみにたゞよひ、

寄るべなき海にさすらひ、

思出の深き船路や、

つゝがなく今日しも果てて、

船は今靜かに歸る、

懐かしき故郷の港。

(國定讀本卷十二第廿五課)

つまりこの繪を詩の形で鑑賞したことになる。

⑤ 月光の曲

「いや、これでたくさんです」

といひながら、ベートーベンにはピアノの前に腰を掛けて、直にひき始めた。其の最初の一音が既にきやうだいの耳には不思議にひびいた。ベートーベンの兩眼は異様に輝いて、彼の身には俄に何者かが乗移つたやう。一音は一音より妙を加へ神に入つて、何をひいてゐるか、彼自らも覺えないやうである。(きやうだいは唯うつとりして、感に打たれてゐる。ベートーベンの友人も全く我を忘れて、一同夢に覺える心地。

折から燈がぱつと明るくなつたと思ふと、

ゆらくと動いて消えてしまつた。

ベートーベンはひく手を止めた。友人がそつと立つて窓の戸をあけると、清い月の光が流れるやうに入込んで、ピアノとひき手の顔を照らした。しかし、ベートーベンは唯だまつてうなだれてゐる。しばらくして兄は恐る恐る近寄つて、力のこもつた、しかも低い聲で、

「一體あなたはどいふ御方でございますか。」

「まあ待つて下さう。」

ベートーベンは、かういつて、さつき娘がひいてゐた曲を又ひき始めた。

「あゝ、あなたはベートーベン先生ですか。」
きやだいは思はず叫んだ。

ひき終るとベートーベンは、つと立上つた。三人は、

「どうかもう一曲」としきりに頼んだ。彼は再びピアノの前に腰を下した。月は益々さえわたつて来る。「それでは此の月の光を題に一曲」といつて、彼はしばらくすみきつた空を眺めてゐたが、やがて指がピアノの鍵にふれたと思ふと、

やさしい沈んだ調は、ちやうど東の空に上る月が、次第次第にやみの世界を照らすやう、一轉すると、今度は如何にもものすごい、いはば奇怪なる物の精が寄集つて、夜の芝生にをどるやう。最後は又急流の岩に激し、荒波の岸にくだけるやうな調に、三人の心はもう驚と感激で一ぱいになつて、唯ぼうつとして、ひき終つたのも氣附かぬくらゐ……………。(同卷十二第九課)

これは元來叙事文だが、こゝに抜いたゞけ(括弧外の本文)についていへば、音楽に對する鑑賞文である。そしてベートーベンのムーンライト、ソーナータを一度でも聴くか、樂譜で見るかしたものなら、如何にもその曲想の中心生命を把へた味ひ方であることを肯くであらう。

⑥ 山里にまかりて詠み侍りける

山里の春の夕ぐれ来て見れば いろいろあひの鐘に花ぞ散りける

能因法師

この歌の如きは、何等の解釋を必要としないほど、辭句平明である。而して上の句に至つては、殊に單なる説明にすぎぬ、下の句、入相の鐘に花がちつたといふも、たゞ實景をありのままに叙したのみである。しかも一首を讀んで

みると、山里の春の夕ぐれの、さびしく美しい風情が、身にしみるやうに感ぜられる。かくの如く人を感じしむる美しさと力とは、そもこの歌のどこにあるか。技巧でもなければ、趣向でもない。たゞこれ自然にして、何等餘計の修飾といふものなく、簡素な修辭と、句々に含む思想の間に存する純な調和とである。短歌といふものの有する生命の一面が、かゝるところに存することは、思ふに和歌史上、古今を通じての事實であらう。(佐々木信綱氏新古今集選釋三六—三七)

他の美は今措くとして、作文に關係のある文學の鑑賞について見ると、「作者の想定」といふことは、つまりその作品の正しい解釋と、正しい禮讚といふことになる。正しい解釋を下さないで、無上に褒めちぎると、見當違ひの讚美に陥る。で、文學作品若くは之に近い一つの文章を鑑賞するにも、「短いものならば一氣に讀下し、長いものなら文段を適宜に切つて、各段の中心思想を吟味し、それ等各段の有機的關係をも見通し、更に一語一句の意味をも、作者の作意にキツチリ合ふところまで解釋しなければならぬ。そしてかうした力は既に講讀に於て養はれて居るべき筈だから、作文では直ぐとその力を實地に應用すればよろしい。

⑦ ポチ (平凡の十四)

長谷川二葉亭

私は性來の朝寝坊だから、毎朝二度三度覺されても、中々起きない。優しくしてゐては際限がないので、母が最終には夜着を剝ぐ。これで流石の朝寝坊も不承々に床を離れるが、しかし大不平だ。額で母を睨めて、津蟹が泡を吐くやうに、沸々言つてゐる。ポチは朝起だから、もう其時分には疾くに朝飯も済んで、一切り遊んだ所だが、私の聲を聴きつけると何處に居ても一目散に飛んで来る。

これで私の機嫌も直る。急に現金に莞爾々々となつて、急いで庭へ降りる所をポチが透さず泥足で飛付く。細い人參

程の赤ちやけた尻尾を懸命に掉り立てて、嬉しさうに面を瞻上げる。視下す。目と目と直たりと合ふ。堪まらなくなつて私が横抱に引ン抱く。ポチは抱かれながら、身を藻掻いて、大暴れに暴れ、私の手を舐め、胸を舐め、頤を舐め、頬を舐め、舐めても、舐め足りないで、悪くすると口まで舐める。父が面を擧めて汚い／＼と曰ふ。成程考へて見れば汚いやうではあるけれども、……しかし、私は嬉しい。止められない。如何して是れが止められるもんか！ 私が何も好い物を持つてゐるぢやなし、ポチも其は承知で爲る事だ。利害の念を離れて居るのだ。唯懐かしいといふ刹那の心になつて居るのだ。

毎朝これでは着物が堪らないと、母は其を零すけれど、着物なんぞの汚れを厭つて、ポチの此志を無にする事が出来た話だか、話でないか、其處を一つ考へて貰ひたい。

理窟は扱置いて、この面舐めの一儀が済むと、ポチも漸と是で氣が済んだといふ形で、また庭先をうろ／＼し出して、縁の下などを覗いて見る。と、其處に草鞋蟲が一杯たか附精つた古草履の片足か何ぞが有る。好い者を看附けたと言ひさうな面をして、其を唾へ出して来て、首を一つ掉ると、草履は横飛にボンと飛ぶ。透さず追蒐けて行つて、又唾へてボンと抛る。其様な他愛もないことをして、活潑に元氣よく遊ぶ。

其際に私は面を洗ふ。飯を食ふ。それが済むと、今度は學校へ行く段取になるのだが、此時が一日中で一番私の苦痛の時だ。ポチが跟を追ふ。うツかり出やうものなら、何處までも／＼隨いて来て、逐つたつて如何したつて歸らない。こツそり出やうとしても、出掛る時刻をチャンと知つて居て、其時分になると、何時の間にか玄關先へ廻つて待つてゐる。仕方が無いから、最終に取擱へて、否應なしに格子戸の内へ入れて置いて出るやうにしてゐたが、然うすると前足で格子を引搔いて、悲しい／＼血を吐きさうな啼聲を立てて後を慕ひ、姿が見えなくなつても啼止まない。

私もそれは同じ想だ。泣出しさうな面をして、バタ／＼と駈出し、聲の聞えない處まで来て、漸くホツとして、普通の歩調になる。而して常も心の中で反覆し／＼此様な事を思ふ。

「僕が居ないと淋しいもんだから、それで彼様に跟を追ふんだ。可哀さうだな……僕も學校なんぞへ行きたか無いんだけど……行かないと、阿父さんがポチを棄てて了ふつて言ふもんだから、それでシヨウがないから行くんだけど……」(二葉亭全集第一卷六四一—六四四)

二葉亭四迷の傑作「平凡」の中でも、佳駒といはれてゐる愛犬の描寫の一節だが、諸君が之をよんだら略々次のやうな文段を立てられようと思ふ。

第一段 朝起……

イ、朝寝坊
ロ、ポチの早起
ハ、一目散に飛んで来る

イ、不機嫌を直す

ロ、ポチの嬉しさうな表情

ハ、目と目が合ふ

ニ、面舐め

ホ、父の小言

ヘ、小言の言ひわけ

第二段 朝飯前……

ト、母の小言
チ、小言の言ひわけ

イ、朝飯
 ロ、ボチが眼を追ふ
 ハ、無理におひ込める、啼く、
 ニ、遠くまできてホツと一息、
 ホ、心で述懐

第三段

朝飯より
登校まで

そして字句の意味は説明せずとも明瞭であらう。

かう一通り文意をはつきりしてから、その文の裏に躍動する作品の生命即ち作意に想ひ及ぶのである。すると「私」といふ主人公をかりて、作者自身の動物愛——それは純真愛にも近い清い動物愛が、しみじみと讀者に浸み込んで来るやうに思はれよう。

次に「正しき禮讚」とは何か、つまり作意にそつて同情することである。處が同情といふものは、自分におぼえが無くては出来ないもので、齒痛に苦しんだことの無い人が、友達の齒痛に、心から同情することは出来ない。友だちが「齒が痛い」といへば「私も一度右下の奥齒がうづいて困つたが……」といつて、その當時の苦痛を思ひ出して、それを通して友達の苦痛に同情するのである。文章もその通りで、甲の作者が自分の生活を文字に示すと、乙の讀者が「私も嘗てさうした生活があつた」とか「私も現にさうした心持に生きて居る」とかいふ、氣持で之に同情するので文

を見るといふことは、自己を呼びかけることを意味する。だから鑑賞はその文の作者が何者であるかを明らかにすると同時に、その文の讀者が何者であるかを明らかにするので、つまり一つの文を読むことは、自分の體驗だけに味到することになる。

⑧ カナリヤ

四條 八十

一、唄を忘れた金絲雀は、

後の山に棄てましょか、

いえ、いえ、それはなりません。

二、唄を忘れた金絲雀は、

背戸の小藪に埋けましょか、

いえ、いえ、それもなりません。

三、唄を忘れた金絲雀は、

柳の鞭でぶちましょか。

いえ、いえ、それははいさう。

四、唄を忘れた金絲雀は、

象牙の船に銀の櫂、

月夜の海に浮べれば、

忘れた唄をおもひだす。

南の國の青々とした木立の中に、四季常住に暖い陽光を浴びて育つたカナリヤが、流れ／＼と歐羅巴にさすらひ、更に東して我日本にも渡つて来て、窮窟な鳥籠の中におしこめられて以來、祖先の故國カナリヤ諸島に思を馳せて、轉々郷愁の思に得堪へず、とまり木の枝うつりすらも臆空になつて、終日終夜、たゞづつとして目をしばたゝいて居る世にもあはれな 金絲雀——、彼をして云はんと欲する處を云はせれば、

我歌は妄りに唄はない、

我に故郷の綠樹と陽光を與へよ、

我に故郷の父母と姉妹と親友とを與へよ、

我を能はんかぎり優遇せよ、

さすれば我はその固有の音に唄はん。

とでもある處だ。けれども折角高價を拂つて買ひとつた飼主としては、毎日々々の餌もあてがつてあるのに何の唄をも酬いない彼女は、實に心外の至である。そこで

後の山に棄てまじよか、

背戸の小藪に埋けまじよか、

柳の鞭でぶちまじよか、

となる。金絲雀の心事を知る作者の、決してそれを許す筈はない。そこで

「いえ、いえ、それはなりません、それはあまりにかは ざう」ですといふ。「ではどうすれば可いんです。どうすればアノかなりやが唄ひますか」と問ひたくなる。それを作者が最後にこたへて「第一等の船(象牙の船)に第一等

の權(銀の權)をそへて、第一等の良夜(月夜の海)に心ゆく舟遊をさせたら、忘れた唄をも思ひ出して唄ふやうになりませう」といふ。言葉は——殊に唄は——就中、最も微妙なるカナリヤの唄は、周囲が多大の思慕と、敬愛と、擁護とを拂つてこそ、始めて聴き得るものである。それを、よつてたかつていぢめ、さいなめしておいて「このカナリヤは駄目だ。てんで唄はない」と責めるのは、責めるもの自身の罪だといふ——これが作者の讀者に向つて大に訴へようとするところである。

聞く、この童話の作者西條八十氏は、詩人としての天分豊かな人であるにも拘らず、父母長上は、氏に物質的生活を強要し、氏が大學を卒業するなり、「早く官途に就け」どこか銀行の就職口を見つけてはどう?」會社でも可からう」など勧められて、氏は固有の天分を發揮することもならず、永らく生活の行きつまりに嘆いたといふ。その悩みは、

後の山に棄てまじよか、

背戸の小藪に埋けまじよか、

柳の鞭でぶちまじよか、

と様に、このかなりやとよく似て居る。そこで作者は心に思ふ。

私だつて静かな書齋に多くの書物、

それに暇さへ與へてくれりや、

立派な詩作もして見せよう。

と、氏の書齋は、かなりやにとつては象牙の船であり、多くの書物は銀の權で、月夜の海に浮ぶのは思索と表現に沈

思する時間の餘裕にも比すべきもの、作者は正しく金絲雀によつて自分の心の姿を唄つて居る。が併し、かうしたこと迄鑑賞するには、作者の性行・閱歴迄も知る必要がある。その豫備知識なくして、この童謡を鑑賞するには、これまで立入らずともよろしいが、少くともこの詩が投げた人生への暗示だけは、味知しなければならぬ。

天分に於て優れたものがあるにも拘らず、境遇に恵まれない爲めに虐げられ、さいなまれて、あたり一般凡夫婦の間に朽ちて行くものがどれ程あることか、又お負けにそんなめに遇はせておいて、その天分を發揮しないからとてよつてたかつて非難し、攻撃し、悪口し、罵詈するやうな不合理・背道徳がどれだけあることが。思へば女性もその一つであり、労働者もその一つであり、少年少女もその一つであつたと觀れば、この一篇童謡の諷するところ、やがて弱者解放の黎明を告げる曉の鐘とも謂ふべく、その旨や深く高いものがある。

以上は必ずしも優れた鑑賞でないかも知れぬが、少くとも作者の作意に同感し得た鑑賞であると信ずる。諸子が同級他生の作品を鑑賞するならば、始めの作者の性行・閱歴にまで立入ることも出来ようし、他一般の文章を鑑賞するにしても、後の程度の一般的鑑賞はなし得べき筈である。

第十五章 手紙の文

序 説

□ 郵便箱の歌

都の町の四つかどの

坪内 逍遙

郵便箱のいふようは

「さても、いそがし我らほど、

せはしきものはまたあらじ。

朝はひきあけ、夜は夜ふけまで、

入れる、取り出す、そのあけたてに、

ばたり、ばつたり、ばつたりこ、

差入れ口の休みなし。

先づ、郵便の品々は、

封書、おび封、ひらき封、

おうふくはがき、なみはがき、

そのいろくの郵便の、

文字もいろく、出す人も、

うけとる人もさまざまや。」

さても、便利な御代のかげ、

四國・九州何のその

北は千島のそのはてまでも、

第十五章 手紙の文

南琉球・臺灣までも、

親子・きようだい・友だちどうし、

たより知らずる、居ながらに。

わけて、なつかし此の女文字。

「お春どには、花かんざしを、

太郎どには、うんどうしやつを、

をばがみやげ」と書いたるはがき、

子たち、さぞかし、郵便箱の

我れが見てさへ、いとどたのしや。

(逍遙選集別冊第三 七九九—八〇〇)

右は坪内先生が國語讀本卷四のために作られたものだが、郵便箱を擬人して、郵便物の色々、殊に手紙の文のなつかしさを歌つたものである。すつと以前の調べ(明治卅四年の統計)だが、一ヶ年間に我國民の使ふ郵便切手は約三億、端書は九億合せて十二億で、之を當時の人口約五千萬に配當すると、一人當り廿四通で、一ヶ月平均二通宛であつたが、それは公然ポストに入れて取扱はれる手紙のことで、その他切手・端書なしで、或は幸便に托したり、又は女中に持たせたりしてやる手紙といふものは更に多い。まして八千萬同胞といはれる今日の我國では、遙かにその數が増して居る筈である。これを見ても手紙の文といふものは、吾々の生活には必要缺くべからざるものであることがわかるし、實際人々の生活から手紙といふものを取上げたならば、その不自由さは想像するに餘りあらう。

手紙は特別の相手に、特別の個 若くは集團が、直接面談に代へて發する書信をいふ。隨て多くの場合個人的であるが、併しいつも個人から個人へ出すものと限るわけにはゆかぬ。「何々會社御中」「何々銀行御中」「某々學校事務室御一同様」「……殿御遺族皆々様へ」といふ風な宛名や、又、殿・様をとつた發信名も、今日では段々増して來る。まして成績品のやりとり・繪はがきの交換・日米人形の往訪と、國際的事象の頻繁な今日となつては猶更である。併し何にしても何等かの特殊關係ある人が、集會か若くはその手紙によつて、さうした特殊關係を結ばうといふ相手方に發せられる談話に代へる文であることに於ては、彼此通じて相等しい。」

處で、談話は直接相手に向つて話しかけるのだから、言ひそなたつても「失禮、まちがひました實は……です」と訂正すればよし、本當にひどく困つた場合ならば「本當に困つてしまひました」と口に言ふと共に、如何にも困つたらしい表情・身振が伴つて、その表現を助けもするが、手紙ではさうはゆかぬ。一旦發信した以上「失禮——」などいつても追つかない「大層困り入り候」と書けば、その文字が示すだけの困り様は相手にわかるが、それを讀みつゝ、その手紙の主が若しぢかに逢つてだつたら、きつとこんな身振と表情とで話すところだらうと、想像して讀む人は餘程相手と親しい仲か、手紙を讀む訓練の出來た人だけである。だからそれ等の幫助便宜はないものと思つて間違のない様、誤解のない様充分に氣をつけて、その上談話の際の心得——即ち自分のまごゝろをこめて、相手に失禮にならぬ様、時と場合に應ずる様、手紙の内容にふさはしい様、そして下品になつたり、氣取り過ぎたりしたものにならぬ様に注意するがよい。

手紙には實用の爲めに書くものと、趣味社交の爲めに書くものがあつて、實用の爲めに書くものは、祝賀・弔慰・忠告・催促・勧誘・通知・依頼・禮狀・斷り狀などあり、趣味社交の爲めに書くものは、年賀・贈答・招待・問候・近

況報知などがある。實用の手紙は正確に簡明に綴るがよし、趣味・社交の手紙は美的に面白く作るがよい。殊に望ましいことは、内容にふさはしい上品な好笑を入れるやうにしたい。この點に於ては、故國木田獨歩の書簡などが宜い。

(獨歩書簡・愛弟通信及び書簡體の小説など)

「誰が」「誰に」「いつ」「何を」

どんな手紙を書く時でもこの四つの事をチャンと頭に持つて居なければならぬ。

一體これは誰がいつて居ることなのか、自分か、父母か、弟妹か、自分だとすれば相手にどういふ關係になるか。對等か、上か、下かと斯う考へねばならぬ。次には全體この手紙は誰にやるのか。友達にか、兩親にか、兄弟にか、弟妹にか、それとも婢僕にか。それによつて自分のいひまはす文の調子がきまつて來るのである。友達ならば

君は何をして居られますか？

弟妹ならば

お前何をしてるの？

兩親ならば

お二方様には如何御暮らしますか？

婢僕ならば

お前も達者か？

と様に、同じことをいふにも、言ひまはしに手加減が入る。相手かまはず誰にでも同じ調子で手紙を書く人は「人を見て法を説く」と云ふ社交上の修練の足りないものである。次には

この手紙は何時書いてゐるのか。無論今書いてゐるには違ひないが、今といふのはいつであるか、春ならば春らしい挨拶もあらうし、夏ならば夏相應の前文も入る譯だから、それを念頭におかなければならぬ。自分の許へ集まつてゐる元の教へ兒の手紙には、極寒と餘寒と炎暑と、残暑との時候をはきちがへたのが時々ある。尤も時候などは自分の感じたままをいへば可いではないかといふやうなもの、古來いひ來たつた常識語だけは知つておかなくてはならない。正月の中頃に春寒料峭としたり、九月に入つてもまだひどく暑いといふので、「炎暑の候」と書いたりするのは、この意味に於て時候錯誤である。

残暑とは名ばかりで、毎日九十幾度といふ昨今の暑さには全くやりきれませんが………
などいへばこの錯誤は免れよう。夏小袖冬上布といった風の時候見舞は書ぬ様注意せねばならぬ。

最後に

この手紙は何をいはうと思つて書いてゐるのか。それを念頭におくことが何よりも肝腎である。よく初心の人の手紙には時候の前置には立派なことばを並べ立てて、數十行も書き連ねながら、肝腎の本文は僅に一二行で、而かも極めて拙い書方をしたのがある。これも一つは前文などは、どの手紙の書物にも作例が出てゐて、作り易いのになつて、本文は自分特有の用事で作例がないといふ爲めでもあるけれども、始終に本文の趣意を念頭におかないところからも來てゐることは確かである。「何のために」といふことを考へないで、手紙を作るのは、目的地をきめないで旅行をするやうなので、どうしても行きあたりばつたりの書きなぐりのやうな體裁になる。先づこの手紙は實用のためか、趣味のためか、實用のためならば催促手紙か、取引手紙かとかう考へれば、自然文の調子がそれに向くやうに出てくるのである。誰だつて火事見舞に行つて、蕪菁から菜種まで氣永に話し込む馬鹿はないから、手紙にしても「チラリホラリと菜の花

咲いて」といふやうな陽氣な前文から書く譯のものでもない。又金錢の融通を頼むのに、司法官の判決文のやうな横柄な文面では可けないことは知れきつたことである。是非こちらの餘儀ない事情を陳べて「成程これなら己むを得ない、無困つて居るだらう。自分の方に都合がつくことなら貸してやりたい」といふ心を起させるだけに作らなくてはならない。つまり手紙といふものは、いつも「此結果として相手が當方に對してどれだけの心持を起し、どれだけの仕向をしてくれたら宜しいのか」といふことを念頭、おいて綴らなくてはならないものである。

㊦ クリスマスプレゼントの禮狀 (男)

クリスマスプレゼント有がたう。早速開封、書物とグローヴと何れも僕には過ぎた上等のものばかり、これは多分「よく勉強よく遊べ」との教訓であらう。イヤどうも有がたう。御好意を感謝する。その中何か御禮を贈りたいとは思つて居るが、取敢ず御禮申しておく。

㊧ クリスマスプレゼント禮狀 (女)

クリスマスプレゼントを戴きまして、早速袋をあけますと、マアどうでせう——、目もさめんばかり美しい緋クロースのグリーン童話——「これはロンドンのマクミリアン書店版の上等だよ」と兄から聞きました——。お負けに立派な譯本と美しいセルロイドの葉までつけて……、わたし嬉しくつて……、それからはお仕事も手につかず、又しても机の前に坐りこんで讀み耽つてゐます。この冬休には、是非デクシヨナリーと譯本とをたよつて、全部讀み終へようと楽しんでゐます。このお禮には、「春の贈物」^{スプリングプレゼント}とでも申して、何か意匠をこらした御年玉をと思つてゐますが、取敢ず右御禮申上げます。

㊨ 遠足の土産にそへて (男)

今回の遠足は、學年別に催されました。僕等は鎌倉方面に出掛けました。八幡宮・大佛・七里ヶ濱・江ノ島など叔父様にいつて見たところで珍らしくもありませう。僕だつてこれまで四度も遊んだところです。けれどもクラスメイトと一緒にいきますと又別の面白さがあります。汽車の中の騒ぎや、海面を見渡しての晝辨當の時はしやぎ様は、本當に愉快でした。僕清ちゃんに何かお土産をと色々考へましたが、學校の規定でお金は一人一圓以上は持たれないものですから、大した買物も出來ず、ホンの印だけに別封貝細工と繪葉書を言傳えますから、清ちゃんにあげて下さい。

㊩ 遠足の土産にそへて (女)

今日は當校の秋季遠足で、一同尼ヶ崎地方に出かけました。晩秋の郊外は、見るもの聞くもの凡て興多く思はれました。それに、今年は全く趣向を變へて、いつもの茸狩の代りに、お諸狩を催されましたので、根が田舎生れの私とて、この方には相當自信もあつて、クラス中第一等の成績、先生もびつくりして「コリヤ驚いた——、一貫三百二十両もある。チャア今日は天木様が一等だらう」などいはれましたが、後程しらべて見ると、果してその通りでした。S停留場からはその重い手提の袋をさけて、半ば得意で、半ば苦しみながら持つて歸りました。そこへ丁度爺やが來ましたので半分をわけてお目にかけます。後半分は叔母様に茹でもらつて、今晚みんなでいただくといふのです。

㊪ 火事見舞 (母の代筆)

今朝方辰爺から聞きました。實に思ひよらぬ御災難でした。御隠居様や由ちゃん(二つ)やその外の皆様別にお怪我はありませんか、お道具などは如何でした? この節の火事は毎日大抵どこかに一つ二つはあるやうなので、馴れつこになつて、昨夜の半鐘など、てんで氣にもとめませんでした。こんな事を知つたら、何をさしおいても駆けつけねばならぬ處ですのに、何とも申譯がございません。大重壹荷取敢ず御見舞の印として持たせ上げます。又この若者は御都

合で何なりと手傳はせて下さい只今父は生憎商用で大阪に参つて居りますので、私に代筆せよとのことでしたから、母の口上をそのまま申上げた次第であります。その母も實は兼約の訪問客——これも過急の要件で参るものなのですが……がありますので、その方が片附次第御伺する様申して居ります
匆々

六 剣道大會出席の有無を問合せ (男)

其後は如何。さて何れ君の方にも通知があつたらうが、來週日曜(十七日)に母校で剣道大會をやるといふのだが、君は行くか。誰か話し相手があれば僕も出かけても可いが、でなければ、お面お胴だけぢやつまらんからなあ。君でも行かれるなら僕も行つても可いと思つてるんだ。一寸聞かしてくれ給へ。序に連中の消息も頼むよ。互に昔とつた竹刀——でそして今もとりつゝあるそれだから、行けば賞品の二つや三つにはありつくだらうし、又所謂後進の奨励にもなるだらうが、行く本人にとつては、同期の懇談の方がより興味があらうではないか。失敬。

七 同返事 (男)

御手紙拜見、相變らず無爲碌々の方だ。形勝の地位に在りながら、例の筆不精で、とかく御無沙汰勝に失敬して居る。さて來る十七日には僕はM町の親戚に用事もあるから、前日かけて行かうと思つてる。連中のことは一向知らんが、鳴尾のTと今津のSとは確かに行くよ。奴さん始終電車で會つてゐるんだ。君も不精をいはずに是非出馬し給へ。逢へば又色々面白い話もあらう。僕はその前土曜日の午後に親戚に出かけて、その日に用事を片付け、翌日曜朝九時頃停留場で君を待つてるよ。左様なら。

八 帝展觀覽に誘ふ (女)

此節、噂の高い帝展觀覽に、お供したいと存じます。丁度、明日は日曜ですから、御一緒に参りませうか。今回の帝展には、新進闊秀畫家の入選も大分あるやうですから、御互繪畫の趣味あるものにとつては見のがしてはならない觀物かと考へます。御都合は如何です。一寸この使に御返事を下さいまし。

九 返し (女)

實は私の方からお誘ひしようかと存じてゐた矢先に、御使を戴きまして有がたうございました。では、甚だ失禮ですが、丁度道順ですので、私は宅でお待ちして居ますから、どうぞ私の方へお寄り下さいませんか。八時開館とか、あまり人出の多くならない中がよろしからうとは存じますが、その邊は御都合次第で結構で御座います。

十 友の遊蕩を諫めて (男)

親愛なるH君よ、今更いふまでもないことだが、君と僕とは従兄弟で、竹馬の友で、其上幼稚園時代からの學友で、小學卒業迄一緒にやつて來たものだ。四月に御別れして以來、君も新しい周圍(K市)の適應に忙しかつたらうし、僕も何かと學科の豫習復習に追はれて、御無沙汰は御互とはいへ、君に手紙はたつた二度目だ。而かも今日は心やすだてに、思ふ存分ぶちあげた所を書くから、君怒らないで読んでくれ給へ。K市の人情・風俗、K中學の狀況、さては地方風物の何かと尋ねもしたいし、一別以來の當地の狀況をしらせもしたいが、それはまあ後のこととして、差當つて今日は君の反省を促したいことがある。

實は一昨日、伯父様から僕宛てて至急親展——、ハテ何だらう。例の戯談好きの伯父様が又僕をかつがつてんだらうと開封して見ると、厳格な楷書で、美濃罨紙五枚に君の近況をこま／＼と書いて、一度忠告をしてくれる頼むとある。驚いて繰返し／＼讀んだが全く有難い親心と、親しみ多い伯父の情愛以外の何物でもないことがわかつた。その大意をいへば「君はK中學入學以後とかく素行が修らず、學校からも三回注意を受け、今回始めての成績なのに随分酷な

點をとつたといふのだ。尤もこの中

- (一) 科外の讀物を濫讀すること、
 - (二) 朝寝坊をすること、
 - (三) 兄弟喧嘩の頻發、
 - (四) 母に生意氣いふこと、
 - (五) 成績の香ばしからぬこと、
- などは、僕自身とても餘り大きな顔でいふ譯にはいかぬが、

(六) 家庭に斷らずに學校を休むこと、

(七) 映畫に耽溺すること、

(八) 小遣金の請求頻繁にして過多、

の三點だけはどうしても君の猛省を促したい。これ等は最早明らかに墮落の徴ではないか？ K市有給助役といふ伯父様の地位はK市としては多くの尊敬を拂はれるだけの立派なものだらうと思ふが、その令息たる君が學校のブラツク・リストに特筆されるやうな不仕らだとあつては、父を辱めることこの上なしと謂ふべきだ。イヤこんなことをいふと、君は父のため、家名のために自由を束縛される法はないと思ふかも知れぬが、この二つは君が將來實社會に立つ曉には、有力な背景となる位のことには君だつてわかるだらう。イヤ假に百歩を譲つて君は父のこと家名のこと、少しも念頭にかける必要がないとしても、第一君自身の成績と健康のために宜しくないではないか。で、今後は絶対に右の三點を改めること、並に之に類似の學生としての左傾的行動には出ないことを誓言して、又その通りを實行してくれ給へ。この

事についての君の考を臆面なく一度僕へ返事してくれ給へ。幸にこの苦言を容れてくれるなら、君一人の幸福は勿論、伯父様・伯母様も悦ばれようし、僕等一家も安心しようといふものだ。若しこの返事を君が起さなければ「絶交——」といふのが世間通常の出方だが、僕の方は事情がちがふのだから、飽くまでこの忠告が徹底するやうに、一ヶ月間待つて君が返事を起さなかつたら、一應當方兩親とも相談して（實はあらかた承諾はとつておいたのだ）伯父様の意見を聽いた上で、君は僕の方へ島流しにして、學校も當方に轉學の手續をとり、寝るにも起きるにも、登下校其他一切僕と生活を共にしようといふ覺悟なのだ。人間一代の中、運命の分水嶺とも謂ふべきこの中學生活の始めに當つて居る御互は、層一層自分の云爲行動を謹まねばなるまいと思ふ。その邊のことまでもよく／＼考へた上、何分の意見を聞きたいものだ。では失敬。

始めにも斷つた通り、露骨な云分は平に許してくれ給へ。他人の中とは違ふんだからね。

㊦ 中途退學した友に (女)

ガスランプがジイ／＼と燃えてゆく六疊の居室で、直子は今貴女に宛てて斯うした手紙を書いて居ます。富代様。あなたとはもう一年も、二年もあはないやうな心地がしてなりません。あなたが御退學なすつたと父から聞きました時、私は病氣で缺席中でした。あなたが初め、御手紙を下さいました時、私は生死の程もわからぬ大病人でした。自然御返事を怠りまして失禮いたしました。一月十三日に病氣づきまして、それからまる一ヶ月といふものは、身動きも出来ません。これが夏だつたら擬似コレラだなど云つて、避病室に隔離されてゐたかも知れません。幸にも此節のことなり、その上兩親や附添看護婦の周到な親切な看護によつて、やつとこつちのものになりましたもの、筆とすることはしばらく禁ぜられてゐたものですから……尤、二月の末にはモウ讀書も、外出も許されまして、二三のお友達へは端書やお

手紙さへも書きましたけれど、あなたのだけは中上げたいことが多いだけに、いざと云つて書きかけることが臆空で、とう／＼延び／＼して今日といふ今日、只今、態々この時間を都合つけて思ひのたけを申上ます。

御退學の御事情は父母からも聞き、御手紙でも拜見し、上杉様からも承りました。まことにお氣の毒とも何とも申し様でございます。けれども、榮枯盛衰は浮世の常と申しますし「古川に水絶えず」とか御家のやうに手廣くやつていらしたおあとは、何といつても一文なしに失敗したやうなことはない、一應御整理さへつけばあとは又こゝ十年とたぬうちにとりかへしがつかう」と父もお噂申して居りますし、母や兄に聞いても同じやうに申しますので、私もそれを心ゆかしの思つてゐます。親戚でもあり、お友達でもあり、とりわけ幼い時から大の仲よしで、これまで御交際願つた貴女の、斯うした御一大事に當つて、お目にさへもようかゝらず、御手紙まで戴きながら、御返事も碌々出さないで今日が日までも過しましたことは、何といつても申譯がありませんが、どうか病氣に免じておゆるし下さい。いつか先生から伺つて、私は今に友情の模範として心に深く刻んで居るお話がありまして、あなたも勿論御存じでせう。あの有名な英學塾の津田梅子女史が、ずっと以前一緒に洋行した時のお友達で、今貧苦の境遇に沈んでゐるのを、同じ洋行連の或華族の奥様と一緒に訪うて、色々とまめやかに慰められたとか——眞の友といふものは、あれでなくてはならないと思ひます。當代様私達は、どうか永久親友でありたいものです。尙ぞれにつきまして、篤と御心持も承り、又私の心持も申上げたいと思ひますから、近い中に一度宅までお遊び旁々いらして下さいませんか。私は病後の靜養——とは名ばかりで、もうピチ／＼して居りますが、外出はとめられてゐますので、お伺ひは出来ませんが、お出で下さる方ならいつでも歓迎致します。少女生活は、感激の多いものとか聞いて居りますが、私たちは切つても切れぬ従姉妹同士で、そして幼馴染で、お負けにクラスメートなのですから、一時の情熱として、泡のやうに消えさせる友情にして

は、あまりに深いものがあると思ひます。お目にかゝつてお話を伺つた上で、私の身にあふくともありましたらば、理解ある父にも、母にも、兄にも相談して、知慧をも力をも借りてでも、出来るだけのことは盡したいと思つて居ます。當代様、かうまで申す直子の眞情をおくみとり下さいまして、どうかなるべく近いうちに、いらして、御腹藏なくお打あけ話しを聞かせて下さい。

尙左に一節を添へて置きます。これは病床で讀んで、折柄、哀れ深く感じたものです。

「嗚呼親愛の友よ。相遇ふ何れの時ぞ。相語る何れの時ぞ。されど兩心相照らさば相隔離するも何の憾かあらん。生

も亦書を惜まざる可し。大兄生の孤獨をあはれまば、金玉の言を惜む勿れ。嗚呼天地に生まるる何の縁ぞ。生まれ。て。相。遇。ふ。何。の。縁。ぞ。相。遇。ひ。相。語。り。相。信。じ。相。愛。し。相。知。る。實。に。何。の。縁。ぞ。小。生。が。懷。を。寛。う。す。る。者。は。實。に。友。の。愛。也。嗚呼實に友の愛也。」

(獨歩書簡九六・明治廿六年十月一日、故國木田獨歩氏が、大分縣佐伯町から、在京中桐確太郎氏に宛てて出された書簡の一節)

繪葉書便り (男女共通)

(1) 輕井澤より

峠越えると夏知らぬ境地の、こゝ毎日七十幾度といふ清涼さで、山の氣を吸つては都の塵を出し、宿の離れを三人で我物顔に占領して、暇々にはスケッチや小品など試みて居ます。くはしくは後程、皆様によろしく。

(2) 大磯から

松青く、砂路白い濱邊に、帆かけ船がチラリホラリと三つ四つ二つ、油の上を滑るやうに往き來し、滄浪閣の墓はずつと向ふの松原の梢に、その一角がチラと見えて居ります。汽車におびえて、パツとたつ鷗は、まるで波に生れた白い

泡の精かのやうにきれいです。だけど、こゝはもうあと二日で引上げねばなりません。御身御大切に。

(3) 桃山御陵

只今當所に奉拜いたし候。さいつ日よりの雨も全く晴れて、山の草木はさみどりに煌めき、眞砂清らの宮路には、田舎よりまゐれる爺嬢も三々伍々いたし居候。御陵の大御前にうなねつきて一齊に最敬禮いたし候ひしごまは西行ならぬど、「何事のおはしますかは」の感しみぐいたし候。昭憲皇太后の御陵も美しく、たふとく春の装ひ一入に拜し上候これより乃木神社へと向ふところに候。

(4) 乃木神社

愛馬神前に侍り、陣營其傍に移され、多年將軍匪躬の節、直にさこそと背かれて尊く感ぜられ候。將軍幼時御家庭の模型は、永久に沈黙の雄辯を以て國民教育を説けるものと存ぜられ候。

(5) 宇治から

「宇治は茶所茶は縁所」の土手に、包み開きて今し樂しき晝餉を終へしばかりに候。箭よりも早き川瀬には、早や當世洋装の梶原・佐々木が、あとになりさきになりつゝ米かし、さして漕ぎのほり居候「世をうち山」とすまゐせし、喜撰ヶ嶽は、まんまるく盛りあがりて、新緑の衣に春雷のヴェールといふハイカラ振り……と折柄響く鐘の音、「あれは鳳凰堂の鐘樓よりにや、あらず、川向の興聖寺ならん」など云ひ合ひ申候。木花咲耶姫にはまだ御目にかゝり申さず、いでこれよりとこの筆とめ申候。

第十六章 記 號

序 說

「リヨコウニツキサシツカエオコル」といふ電報は、「旅行に就き差支起る」ともとられ、「旅行日記差支起る」ともとられる。若しこれに讀點を入れて

「リヨコウニ、ツキ」

とすれば「旅行に就き」となり、

「リヨコウニツキ、」

とすれば「旅行日記」となる。この讀點の無いために大きな間違が出来たことは、古今東西共にその例が多い。かうした場合作者にとつては、自分の表意を充分にするため、讀者にとつては、その文を正しく解するため使ふ符號について、規定をたてたものは、従來所謂「記號法」(こゝでいふ讀解記號)である。處が近頃の讀書人は、本文繕讀中の簡単な感想をも記號で表すやうになつた。今之を「鑑賞記號」と名づけて、便宜上こゝに併せ掲げることにした。

● 讀解記號

(1) 句點 (マル・句切) ○ あれは僕の作つた曲だ。聞き給へ。なか／＼うまいではないか。(月光の曲)
意味の切れる處、文の完結する處につける。

(2) 讀點 (テン) 、 やがて指がピアノの鍵にふれたと思ふと、やさしい沈んだ調は、ちやうど東の空に上る月が

次第々々にやみの世界を照らすやう、一轉すると、今度は如何にもものすごい、いはば奇怪な物の精が寄集つて、夜の芝生にをどるやう、最後は又急流の岩に激し、荒波の岸にくだけるやうな調に、三人の心はもう驚と感激で一ぱいになつて、唯ぼうつとして、ひき終つたのも氣附かぬくらゐ。(月光の曲)

には十一ヶ處讀點がある。これは聲にあげて讀むときこゝで息をつぐといふ意の印である。

又十返舎一九の「奥州膝栗毛」に「うどんそばありやなきや」のかど行燈を見て、業平の「我思ふ人はありやなしや」を思ひ出し、洒落た主人だと思つて「我思ふ酒はありやなきや」といつて、はいつて見ると、これはしたり「饅頭蕎麥あり、柳屋」といふのであつたとある。これを誤解のないやうにするには、矢張讀點を入れ、濁點をも入れてうどんそばあり、やなきや

とすればよろしい(これは始めの「旅行に就き」と同様である)つまり讀點は朗讀の息繼の箇處、誤解を生じ易い箇處に入れるものである。で、誤解の憂のないところは省いた方が宜い。

例、村崎工學博士の、「電氣の世の中」と題する講演があつた。

「工學博士の、……」此の讀點は入らない。尤國定教科書には

老僧のまはりに集つて、「氣違よ〜」とはやし立て

のやうなものもあつて、嚴重な制限はないのである。

(3) 小讀點(ボツ・黒マル)・エヂソンの發明せるは電話・電燈・電信・電車・活動寫眞・蓄音機に關するものなど極めて多く、……(トーマスエヂソン)

名詞が二つ以上つゞく時その中間に入れて區別する。これは

ヴィクトル・ユーゴのレ・ミゼラブル

など、外國人名・書名などで姓名や品詞の中間に入れることもある。

(4) 括勾(カギ)「」

正「山びことは何のことでございますか」

父「ごむまりをかべになげつけると、はねかへるでせう」

正「は〜」

父「人のこゑも山の中では、かべにあたつたごむまりのやうに、かへつて來ることがあります。それが山びこです」

(山びこ)

のやうに、對話の筋を明別するのにつかふ。

五箇村の人々は各自の村の騎手に向つて「ぜひ勝つてくれ」負けたら村のはぢになるぞ」しつかりやつてくれ」

などと、口々に勢をつけてゐる。(競馬)

のやうに、對話でなくとも、各自の詞の筋を區別するにも使ふ。

「これが五日もつゞくと、ひぼしだ」

と言ふれふしのこゑが、其所此所にします。海)

ひとりごとを區切るのにも使ふ。

にいさんが「我は海の子」をうたひ(潮干狩)

のやうに、書名や題名を明記するにも使ふ。

古語にいふ「精神一到何事か成らざらん」と。
のやうに、格言・俚諺その他引用の語句をしきるにも使ふ。
その他文段を切るにも使ふ。

(5) 二重括弧 (二重カギ) 『』 「……」……ところがめぐみ深いジュピターといふ神様が、それを見て『あゝ、かはいさうだ。あのアルカスに親殺の大罪をさせさせてはならぬ』と、すぐに親子の者を天へ連れていつて、大熊座と小熊座になさつたのださうです。』 「星の話」

時に天照大神の使者建御雷神命此の地に來りていふやう、

「大神の勅にいはいはく『此の葦原の中つ國は皇孫之をしろしめすべし』と。快く此の國をたてまつり給ふや如何に」
の様に、括弧の中に又括弧の必要が起きた時に使ふ。
(出雲大社)

(6) 括弧 () その日(十三日)の午後、公爵(徳川慶喜公)の御感想
など註釋的に挿んだ語句をしきる。

7 情呼・強調の符號 ! カタカナ

(イ) ! (感歎符) 其から水! あゝ此様な水が縦横に市中を流れて居たら、東京も莫大の金をかけて罪人まで
こしらへずに濟んだかも知れぬ。 (徳富蘆花 思出の記)

(ロ) —— (情呼線) 「私も姉上と同じ心で——、ほんたうに姉上は私の思つてゐる通りをおつしやいました。
唯少しおつしやり足りませぬばかりで——、私はありとあらゆる身の楽しみを退けても、ひたすら父上を大事に

致すのを此上もない仕合はせと存じてをります。」 (リヤ王物語)

(ハ) …… (情呼點) さうして出し抜けに「先生」と大きな聲を掛けた。先生は突然立ち留まつて私の顔を見た。

「何うして……何うして……」 (夏目漱石 心)

「一度ならず、二度三度、不思議打たせて知らせたに……」

婆さんの聲が次いで響いた。勅次もおつきも只凝然として居るのみである。

「俺が達者で居るならば……」といふ句が讀まれた云々(長塚節 土)……は又「下略」の符號にも使ふ。

例「バスケットの中には、タオル・石鹼・海水着……と澤山つめこんで云々」

又近頃はこんな場合に

「バスケットの中には、タオル・石鹼・海水着等々と澤山つめこんで云々」

などともする。

(ニ) カタカナ ジイ／＼と燃えて。チャンと坐つて。マサカ——、そんなことは、ありますまい。都合六人
のものがゴホン／＼の有様故云々。

(8) 疑問符 ?

「お名は?」

「岩本と申します」

「君は如何?」

「僕も御供します」

など、疑問の意を表す符號をいふ。この外近頃の文章にはまだく色々の記號が用ひられて居るから各自、それ等の用ひられてある場合を考へて、この上に補ふとよろしい。

鑑賞記號

(1) 點、批點、、、、 圈點○○○○ 二重圈點◎◎◎◎ 讀んだ文章中、特に感興を覺えた處に批點を打ち、もつと面白いものには圈點をつけ、更に面白いものには二重圈點を入れる。

例、日本文學に、歌の徳が靈妙なる力を現すといふ話が澤山あり、又之れを仕組んだ作品が澤山あるのは、日本人が昔から文學に一種の神性を感じ、其處に靈的の意味を理解することが一般に出來て居るといふ事を示すものでありますから、此點だけでも、文學的に日本人は世界に誇ることが出来るのであります。(松浦一氏文學の本質、七)

(これ等の符號は、作者自身も、強調の力點を示すのに使ふこともある。)

(2) 線、點線…………… 單線——— 複線(二重線)————— 前の點の代りに、それく感興の厚薄に應じて用ひる。けれどもこの種の記號で不十分な時は詞で短評を加へる。そしてこれ等鑑賞記號は作文の添削記號としても用ひる。

新文章作法講話 (終)

Ashiyama

昭和六年十月十五日印刷
昭和六年十月二十日發行

(新文章講話奥附)

定價金壹圓八拾錢

著者 三浦圭三

發行者 東京市四谷區本村町廿七番地
會社 文光社

右代表者 大元茂一郎

印刷者 東京市神田區表神保町一番地
安田久仁

不許複製

發行所 東京市四谷區本村町二七番
會社 文光社

發賣所 東京市京橋區京橋二ノ三番
目 黑書店

(東京市神田區表神保町一丁目健捷堂印刷)

475
k

Handwritten notes in blue ink, oriented vertically on the right page. The text is difficult to decipher but appears to be a list or series of entries.

611
124

